

マルクス剰余価値論の形成過程*

——『哲学の貧困』(1847年), 「賃労働と資本」(1849年), 「1851年1月7日付エンゲルス宛書簡」および「リカード抜粋」(1851年)における——

橋本直樹

目次

序 五つの課題ならびに分析視角の設定

1. 第一の課題: 「ロンドン・ノート」第Ⅷ冊「リカード抜粋」(1851年)の検討

2. 分析視角および第二～第五の課題設定

I 1840年代後半における資本価値の増大把握

1. いわゆる「公共の富の増大」(『哲学の貧困』)

2. 「生産的資本の増大」(「賃労働と資本」)

II 「価値論に基礎づけられていない蓄積論」の内実とその克服への萌芽

——1840年代後半と1850年代前半との相違——

1. 1840年代後半の「価値論に基礎づけられていない蓄積論」の内実

2. 「1851年1月7日付エンゲルス宛書簡」におけるリカード地代論の克服

III 1850年代前半(「ロンドン・ノート」第Ⅷ冊「リカード抜粋」)における資本価値の増大把握

1. 「リカード抜粋」の構成とその作成意図について

2. リカード資本増加論の批判と資本価値増大の問題設定

3. 諸見解の検討

4. 価値増加論問題解決の基本論理 剰余価値論の諸要素の萌芽

結 第三の課題への対応 今後の研究課題の設定

引用文献一覧

* 本稿は2020年度科学研究費助成事業(科学研究費補助金)研究種目「基盤研究(B)」研究課題「マルクス口述・エンゲルス筆記説に基づく『ドイツ・イデオロギー』テキストの再構成」(研究代表者: 窪俊一)[研究課題/領域番号: 18H00834]の研究成果の一部である。

序 五つの課題ならびに分析視角の設定

1. 第一の課題：「ロンドン・ノート」第Ⅷ冊「リカード抜粋」（1851年）の検討

後には経済学者として最もよく知られることになるカール・マルクスは、『資本論』に先立って、実質的にはその劈頭、商品・貨幣論でもある『経済学批判』を1859年に出版する。直接『資本論』に結実する最初の手稿『経済学批判要綱』（1857/58年執筆）を承けての著作である。とはいえ、経済学の著作を公刊するのはマルクスにとって初めてのことであった。それまでのマルクスはジャーナリストないしは革命家としてのみ知られていたためである。したがって、今では《唯物史観の定式》が叙述されていることによってむしろ著名であるが、この『批判』の「序言」において、マルクスは「私自身の経済学研究の歩みについて二、三述べ」、経済学の研究者でもあることを強調しなければならなかった。

しかしながら、わずかでも青年マルクスの思想形成の歩みを見るならば、マルクスはパリおよびブリュッセルに滞在していた1844年から1845年にかけてと、ロンドンを亡命の地と定めた1851年と、すでに二度にわたり、企図していた「経済学批判」体系の終了を自認していた時期のあったことが分かる。

一度目は、明確に経済学著作の出版を計画していた。『マルクス/エンゲルス著作集（MEW）』のうち往復書簡を収録する最初の第27巻の冒頭に置かれた——したがって、『著作集（MEW）』収録のマルクス/エンゲルス往復書簡中最初のものである——「1844年10月上旬マルクス（在パリ）宛エンゲルス（在バルメン）の手紙」に次のような一節がある。

「ところで、君の集めた材料がすぐにも世のなかに出されるように考えてみたまえ。今が絶好の潮時だ。僕もしっかり仕事をすることにする。そして今日からすぐにまた取り掛ろう」¹。

この「君の集めた材料」の箇所には『著作集』編集者の後注6が付されており、そこでは次のように解かれている。

「エンゲルスがここで言っているのは、マルクスが計画していた労作『政治学および国民経済学の批判』のことである。マルクスは1843年末以来経済学の研究に携わっており、すでに1844年の春には、唯物論と共産主義の立場からのブルジョア国民経済学批判を発表するという計画を立てていた。当時執筆された手稿はその一部分が保存されているだけで、これは『経済学＝哲学手稿 1844年』という題名で知られている〔……〕。〔……〕彼の著書『聖家族』の仕事は経済学の研究を一時中断させ、1844年12月にやっと彼は再びこの課題に取り組むことができるようになった。1845年および1846年にマルクスが作成した概要や抜き書や覚え書はたくさん保存されているが、これらはイギリスやフランスやその他の経済学者たちの労作の研究中に

¹ Der Brief an Marx, [Anfang Oktober 1844]. In: Karl Marx, Friedrich Engels, Werke (MEW), Berlin 1963., Bd. 27, S. 8 [『マルクス＝エンゲルス全集』第27巻, 大月書店, 7頁] .

できたものである。2巻から成る著作『政治学および国民経済学の批判』の出版に関してマルクスが1845年2月1日に出版者レスケとのあいだに締結した契約は、1847年2月にレスケによって破棄された」²。

2巻本『政治学および国民経済学の批判』の出版計画については、上記の契約書が『著作集』同巻の後注365で詳説されている。なお、『聖家族』の仕事のみならず、後に『ドイツ・イデオロギー』として刊行が計画される著作手稿に至る仕事も中断の大きな理由となったのは周知のことであろう。

さて次に、企図していた「経済学批判」体系の終了をマルクスが自認した時期の二度目については、ロルフ・ヘッカーの次の叙述³が適切な評価であろう。

「マルクスのドイツからロンドンへの強いられた亡命（1849年末）後、彼は改めて集中的な経済学研究を開始する。マルクスは大英博物館の図書館等において、ジョン・ステュアート・ミル、ジョン・フラートン、トーマス・トゥック、ロバート・トレンズ、ジェイムス・テイラー、デイヴィッド・リカード、アダム・スミス（今では英語版で）およびトーマス・ロバート・マルサスといった最重要の諸著作を抜粋する。すでに1851年2月に研究した著作の簡潔な要約を「プリオン：完成された貨幣制度」のタイトルで作成する。1850年から1853年までの伝承された24冊の「ロンドン・ノート」が記録しているのは、マルクスが回顧して確言したように、彼がどれほど網羅的かつ批判的に「経済学の歴史に関する膨大な資料」を入念に検討したのか、である⁴。その間、マルクスはエンゲルスに宛てたある手紙において、楽観的にこう予想している。すなわち、「最悪なのは、いま突然僕の図書館勉強が妨げられるということだ。僕はあと5週間のうちには経済学のガラクタすべてを始末できるまでになっている。もしこれができれば、家では経済学を仕上げ、博物館ではほかの科学に取りかかるだろう。僕は退屈し始めている。要するに、この科学はA・スミスとD・リカード以降はなんの進歩もしていないのだ。たとえ個々の研究では、しばしばとても細かい研究では、たくさんのがなされているにして

² MEW, Bd. 27, S. 618, Anm. 6. なお、以下、[……]は、橋本による省略を示す。また、下線は、特に断らない限り原文の傍点等による強調を示すこととする。とはいえ、ここは橋本による強調。

³ Hecker, Rolf: Der unvollendete Weg des Kapitals. In: Bouvier, Beatrix / Auts, Rainer (Hg.), KARL MARX 1818 – 1883 LEBEN. WERK. ZEIT. Große Landesausstellung 2018 in Trier / Rheinisches Landesmuseum Trier / Stadtmuseum Simeonstift Trier, Theiss Verlag 2018, S. 281/282 ちなみに、引用の最後の部分にある「発展した資本主義的貨幣市場の機能メカニズム」への関説は、この研究ならびに、そうしたメカニズムを対象としている俗流経済学の批判的研究の重要性を示している。本質的な諸関係がいかに転倒したこのメカニズムを形成し、またそれがどのように現象し、どのようなイデオロギーを生み出すのか、さらにそれらが本質的な諸関係にどのような反作用を及ぼすことになるか等の諸問題が解明されなければならないからである。したがって、それを経ずには、「即座の仕上げ」はマルクスにそもそも無理であったことが分かる。これは現在の、経済の金融化等の諸事象にも妥当する問題であり、マルクス『資本論』の形成史を追跡する現代的意義を再確認することができる事柄の一つである。

⁴ 上掲 Hecker 論文の原注3) カール・マルクス『経済学批判』第1分冊、『著作集』第13巻, MEW, Bd. 13, S. 10 [杉本俊朗訳; MEGA² II/2, S. 102]。

も」⁵。マルクスは厄介な状況で暮らしていたが、しかしながら、偉大なスコットランド人スミスおよびイングランド人リカードを凌駕するための大著を短期間でつくり出すことができると思える33歳であった。これらのノートをもとめた、「貨幣制度、信用、恐慌」という表題をもつある総括において、マルクスは次第に発展した資本主義的貨幣市場の機能メカニズムの手掛かりをつかんだが、即座の仕上げについてはもはや語っていない。

以上、やや詳しく見たが、企図した「経済学批判」体系の終了をマルクスが自認していた時期のうち一度目である、1844/45年における彼の経済学研究への最初の取り組みについては、いわゆる「初期マルクス」研究の対象となってきた。この研究は、その主な素材——彼がもっぱらパリに滞在した折に作成した『経済学・哲学手稿』の第一手稿の後半部分——が、後に公刊された際に、編集者によって《疎外された労働》と名付けられたために、「疎外論」の研究としても行われてきた。筆者は、この時期のマルクスの「経済学批判」の内容については、私的所有の諸形態とその主体的・本質的要因である疎外された労働の諸形態とを用いた「経済学批判体系の端緒的形成」であると特徴付け、すでに一定の研究を公表している⁶。

また、それに引き続く、いわば「初期マルクス」の段階の理論および運動双方の活動の集大成とも言える『共産党宣言』についても、その初版がどのような経緯で出版されたのかを軸に、詳しい解明を行った⁷。

さらに、1848年の二月/三月革命敗退後のロンドン亡命直後、1850年におけるマルクスの活動の実際に即して、彼が経済学研究を再出発させる実態を詳論した⁸。

したがって、次には、企図した「経済学批判」体系の終了をマルクスが自認していた二度目の時期である1851年におけるその「経済学批判体系」の実際を詳らかにしてみなければならない。この作業を1851年の「ロンドン・ノート」第Ⅷ冊の「リカード抜粋」を素材として試みるのが本稿における第一の課題であり、主に第Ⅲ節において果たされる。

2. 分析視角および第二～第五の課題設定

さて、いわゆる疎外論と呼ばれる論理構造は、マルクスに先行する、重金・重商主義者、古典経済学者、初期社会主義者・共産主義者、ドイツ古典哲学者らがそれぞれの立場で獲得したブルジョア社会（市民社会・資本主義社会）認識を、批判的に一つの総体に仕上げるなかで生成してくる、まさしくマルクス独自の方法の原初形態であった。それ故、そこには、ブルジョア社会とそれを形成する経済的諸関係およびそれらを反映する諸範疇の特殊歴史的性格についての直観的把握は存在するものの、次のような欠陥があったことは否定し難い。即ち、

⁵ 上掲 Hecker 論文の原注4)「1851年4月2日付フリードリヒ・エンゲルス宛カール・マルクスの手紙」『著作集』第27巻、MEW, Bd. 27, S. 228 [岡崎次郎訳]。

⁶ 拙稿「経済学批判の端緒的形成——《パリ草稿》における「私的所有」批判——」福島大学経済学会『商学論集』第48巻第2号、1979年10月を参照。

⁷ 拙著『『共産党宣言』普及史序説』八潮社2016年、「第1部『共産党宣言』初版研究の新段階」参照。

⁸ 拙著『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』八潮社2018年を参照。

「疎外論においては、経済学上の諸範疇の批判的展開の際、個々の範疇についての分析が、きわめて不十分なのである。国民経済学のみならずさまざまな自己矛盾およびこれを支えるそれぞれのレベルでの基底についての詳細な検討が不足しているからである。したがって国民経済学のみならずさまざまな自己矛盾がブルジョア社会のどの側面をどの程度正当に反映するものであるのか、またこれらの側面同士の規定・被規定の序列がどうであるのかも、十分に把握されていないわけである」⁹。

とするならば、「経済学批判」の本格的な形成を追跡するためには、このような経済的諸範疇の具体的な分析がどのように進展してゆくのかを見なければならぬこととなる。そして、それを行うためには、少なくとも『資本論』第1巻初版が出版された1867年までの20数年という長大な期間と、『資本論』全3巻、さらには後半体系という広大な領域と、時系列・論理系列二つながらを一挙に視野に収め得る分析視角を確保することが、まずもって必要とされる。この分析視角の確保が本稿における第二の課題であり、序の以下の部分において果たされる。

如上の形成史研究にとって、格好の分析視角となるのは、『経済学批判要綱』における「資本の価値の増大について」¹⁰部分が提起する諸問題である。

『要綱』の「資本に関する章」の生産過程論に相当する部分に目を通したことがある者は誰しも、そこで剰余価値論の基本的な構成諸要素が出尽くしていることを確認すると共に、「生産力が倍加したとするならば[……]」という仮定の下に行われる、度々の¹¹、それも計算間違いの多い設例に接し、それがどのような意味を持っているのかに、幾何かの疑問を抱くはずである。が、このような疑問は、「こんないまましい計算まちがいがいなど、どうにでもなるがいい」というマルクス自身の言葉¹²や、「ここでいちいち追う必要のない、多くの重なり合った計算間違いに陥っている」というような趣旨の評言¹³に出会うと、いつしか拡散してしまいがちである。

しかしながら、上記の『要綱』読者の疑問は意外に正当なものであって、次のような極めて大きな意味を孕んでいる。

まず、問題を明瞭にするために、この「資本の価値の増大について」部分を承けつつ、「生産力の増大の結果生ずる価値に関する問題」の度重なる[3度目の(?)一橋本]検討の成果を基に「生産性の増大」の価値に及ぼす諸影響が取りまとめられている部分を見てみよう。

「生産性の増大は、それが交換価値の絶対額を増加させないにしても、剰余価値

⁹ 拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論——経済学的諸関係＝諸範疇の転倒 (Quidproquo) 構造——」[編集顧問] 小林 昇・富塚良三・渡辺源次郎、[編集委員] 相沢与一・市川佳宏・下平尾勲・中川 弘・真木実彦・吉原泰助・米田康彦『講座・資本論の研究』第1巻 中川 弘 編『資本論の形成』青木書店 1981年、第IV章、162頁。

¹⁰ これは、マルクス Referate zu meinen eignen Heften. In: Karl Marx, Friedrich Engels, Gesamtausgabe (MEGA³), Berlin 1980. II/2, S. 276に依拠しての呼称である。

¹¹ 例えば、Karl Marx Ökonomische Manuskripte 1857/58, MEGA² II/1. 1, S. 249, S. 278 u S. 296 など。

¹² Ibid., S. 286.

¹³ Schrader, F. E.: Restauration und Revolution – Die Vorarbeiten zum „Kapital“ von Karl Marx in seinen Studienheften 1850–1858, Hildesheim 1980, S. 163.

(Surpluswerth)を増加させる。それは諸価値を増加させる。なぜならそれは、新たな価値としての価値を、即ち、単に等価物として交換されるだけでなく、自己をあくまで保持してゆくような価値を、一言でいえば、より多くの貨幣を創り出すからである。問題は、それが結局は、諸交換価値の合計額を増加させるのか？ということである。基本的には、このことは認められている。というのも、諸資本が蓄積されるにつれて、貯蓄が、したがって生産される諸交換価値が増大することは、リカードもまた認めているからである。貯蓄の増加とは、とりまなおさず、自立的諸価値——貨幣——の増加にほかならない。ところが、リカードの証明は、この彼自身の主張とは矛盾しているのである¹⁴。

この叙述は、一読しただけでも次のようなさまざまな疑問を生じさせる。

即ち、まず、「生産性の増大は[……]交換価値の絶対額を増加させないにしても、剰余価値を増加させる」としているが、これはどのように説明されているのか？次に、「生産性の増大」は剰余価値を増大させることを通じて「諸価値を増加させる」とするが、これはどのような事態であり、またどのように説明されるのか？さらに、問題は、生産性の増大が、「結局は諸交換価値の合計額を増加させるのか」どうかということであって、それは「基本的に[……]認められている」とするけれども、何故、これが問題であるのか、また、「結局は」、というのは、どういうことなのか？加えて、「認められている」と言う際の論拠として、リカードを挙げているが、それはリカードのどのような主張を指しているのか？そして、「リカードの証明は、この彼自身の主張とは矛盾している」と言うが、このこと自体の内容は何か？また、「リカードの証明は、この彼自身の主張とは矛盾」しており、したがって、誤っていると言うのに、リカードが認めていることをもって先の論拠として良いのか否か？

この部分について目配りしている数少ない研究者の一人、山田鋭夫は、その孕む問題をつぎのように把握している。即ち、

「生産の増加は剰余価値増加を帰結させることは明らかだとして、それはさらに価値総体に対してはどうか。もちろんさしあたり何の変化も及ぼさない。[……]これはすでにリカードの証したところ[……]であった。だがしかし、そこで終わってよいのか。「たんに使用価値が増加するだけなのか。」この疑問から出発してマルクスは、使用価値と価値の形式的分離のうえに生産力増加は価値増加と無関係だと言いつてるのではなく、資本のもとでの両者の有機的関係をこそ検出しようとする。それが『要綱』価値増加論である」¹⁵。

だが、山田も、先の度々の計算例の箇所から生じざるを得ない種々の疑問に対しては、「生産力の増加はむしろ価値を増加させると把握さるべきだというのが、紆余曲折の多い文脈のなかでマルクスのこだわった論点のようである」¹⁶と推測するにとどまり、十分な解答をするまでには至らな

¹⁴ MEGA² II/1. 1, S. 295

¹⁵ 山田鋭夫『『経済学批判要綱』における生産力と価値増殖』大阪市立大学『経済学雑誌』第82巻第6号、1982年3月、62頁。

¹⁶ 同前、65頁。

い。

以上に示してきたような疑問をより正しく規定し、それに答える手掛りを得るためには、山田も注目しているが、先の引用におけるリカードの考え方に着目する必要がある。マルクスは、このリカードの考え方に対する批判を、「資本の価値の増大について」（山田では「『要綱』価値増加論」）部分の後半部で行っている。そして、そこで批判の対象となっているのは、リカードの『経済学および課税の原理』第20章「価値と富との区別、その特性について」において展開される諸命題である。とりわけ、そこでの①“国富増加の二方法”および②“資本・追加資本”の両規定についてである。これらを次に引用しておこう。

①「[……] 一国の富は二つの方法で増加しうることがわかるであろう、すなわち、それは収入のより大なる部分を生産的労働の維持に使用することによって増加しうる。——この方法は、たんに商品の総体の分量を増加させるばかりでなく、その価値をも増加させる。あるいはまた、一国の富は、労働の追加量を少しも雇用しないで、〔労働の〕同一量をより生産的にすることによって増加しうる、——この方法は、商品の量を増加させるが、その価値を増加させないであろう」¹⁷。

②「資本は、一国の富のうち、将来の生産を目的として使用されるその部分であって、富と同じ方法で増加しうる。追加資本は、熟練および機械の改良から取得されようが、あるいはより多くの収入を再生産的に用いることから取得されようが、等しく将来の生産において有効であろう、というのは、富はつねに生産される商品の分量に依存し、生産に使用された器具が取得されたさいの便宜さとはなんらの関係もないからである。一定量の衣服と食料は、100人の労働によって生産されようと、200人の労働によって生産されようと、同数の人間を維持かつ雇用し、したがって同量の仕事をなさしめるであろう。しかし、これらの物は、その生産に200人が雇用されたとすれば、2倍の価値をもつであろう」¹⁸。

そして、このリカードの両命題は、マルクスが、その「経済学批判」を形成してゆくに際して、それぞれの時期に（それも要所と思われる箇所）常につづかされた命題なのである。そうした箇所は、まず1840年代においては、直接に上の命題ではないものの、同じ『原理』第20章を念頭に置いての展開と言える『哲学の貧困』における「公共の富の増大」についての叙述、そしてまた「賃労働と資本」における「生産的資本の増大」についての叙述である。さらに、1850年代に入っては、ロンドンにおける、50年から53年にかけての経済学諸著作からの抜粋を主とする24冊のノートのうち、その第Ⅷ冊中に見出される「リカード抜粋」中、マルクスが比較的長い評注を付している部分である。さらに、50年代後半、1857/58年の『経済学批判要綱』は、今まさに問題が引き出され、それを示している当の箇所である。

¹⁷ Ricardo, D.: On the Principles of Political Economy and Taxation, The Works and Correspondence of David Ricardo, vol. 1, Cambridge 1981, p. 278.

¹⁸ Ibid., p. 279. 下線は、後の（本稿65頁）「リカード抜粋」でのマルクスの強調点であることから、橋本が付した。

思うに、国富増大こそは、ブルジョア社会成立以来、経済学の枢要点であった。しかも、あらゆる経済学書は、国富について、その源泉・その増大法を示してきたものと言いつても過言ではない。経済学体系は、良かれ悪しかれ、この国富増大をこそ支柱として形成されているからである。

マルクスは、それに反して、そうした国富の増大が、労働者に、どのような状態を余儀なくさせるのか、またそれはどのような意味を持っているのかにこそ、注目する。この観点から、マルクスは、経済学者以上に、富の増大についての研究を深めてゆく。その際に、研究の大きな手掛りとなったのは、「経済的諸関係＝諸範疇の自己矛盾に由来する二種の対立」¹⁹の検討であるが、とりわけ次のような「経済学の最大の難問」²⁰であった。即ち、「労働の生産量が上がったために使用価値の量が増えても、なぜその価値は増えないのか？」²¹、また「富は価値であるにもかかわらず、一国民の生産物の価値が減るときにこの国民の富が増えるということはどうして可能なのかという問題」²²である。先のリカードの命題は、この問題に対して経済学が与えた諸解決における一方の旗頭であった。

マルクスはこの問題を独自に解決してゆく。「資本家的秩序を社会的生産の歴史的に過ぎ去る発展段階」²³と見ている彼は、「このブルジョア的生産様式を社会的生産の永遠の自然形態と見誤るならば、必然的にまた、価値形態の、したがって商品形態の、さらに発展しては貨幣形態や資本形態などの独自性をも見損なうことになる」²⁴という点に気付いてゆく。このような見地から、先のリカードの命題を完全に批判しきるためには、『資本論』全論理次元の完成を待たなければならない。というのは、引用を一読すれば明らかのように、価値と富との区別、国富増加の二方法、追加資本規定——これらは、『資本論』第1巻次元で整序してさえ、交換価値と使用価値との区別、絶対的剰余価値と相対的剰余価値各々とその生産の区別、剰余価値の資本への再転化、にそれぞれ対比される論理的内容を含んでおり、価値論・剰余価値論・蓄積論の三つの次元にまたがる問題構成をもつものと見なければならぬからである。

それ故、逆に、この国富の増加の問題の究明を進めるなかでこそ、はじめて「経済学批判」の体系構成が分出・形成されてくるとも言い得るのである。

そして、この国富増加の問題を解決し、経済学を批判しようとするマルクスに、重要な鍵となったのは、後にマルクス自ら『資本論』中の最良の点として定式化される次の二点に帰着する分析の成果であった。即ち、

「(1) (これには事実の一切の理解が基づいている) 第1章ですぐに強調されているような、使用価値で表されるか交換価値で表されるかに従っての労働の二重性、(2) 剰余価値を利潤

¹⁹ 前掲、拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論」149～153頁。

²⁰ Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie. In: MEW, Bd. 23, S. 634.

²¹ Ibid.

²² Ibid. オリジナルは Say, J.-B. 中野 正 訳『恐慌に関する書簡』日本評論社 1950年、「セーの「マルサス氏への手紙」(公開書簡)」, 121頁。

²³ Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 19.

²⁴ Ibid., S. 95.

や利子や地代などというその特殊な諸形態から独立に取り扱っているということ」²⁵。

このような分析成果の生成とその展開自体も、実は国富の増加の問題の追求、とりわけ、生産力の増加が価値・使用価値（富）それぞれに異なった影響を与えている事実を目を留め、この分析を続けるなかで、可能となってきたものだからである。

このように考えると、『要綱』「資本の価値の増大について」部分の孕んでいる問題は極めて大きなものであると見なければならぬ。山田のように、生産力の増大が、使用価値および価値にどのような影響を与え、それらがどのように異なっているか、またそれらの有機的関係がいかなるものであるか、これらを、『要綱』内で明らかにすることは、確かに一つの大きな成果ではあるものの、そこに留まったままではいけない。『要綱』内部では解明し得ないものが含まれているからである。

今や、本稿において、マルクスの「経済学批判」の形成過程を追跡するに際しての、次のような一視角を獲得したと言い得る。即ち、まず、検討すべき箇所は、マルクスが国富の増大という問題設定を行っている文脈に限定することができる。そして、その問題がどのように把握されているのかを見る〔表象把握〕。マルクスはその問題を、とりわけ生産力の増大に着目して検討しているわけだが、その際、それが価値・使用価値にどのような影響を及ぼすと彼が考えているのかという点に照らして、労働の二重性把握と剰余価値の独立的把握の確立の程度を見る〔下向・分析過程把握〕。また、他方、この（未だ不十分ではあろうが）二つの把握を基礎とした経済学批判体系がどの程度にまで生成しているのかを見る〔上向・総合過程把握〕——このような視角である。

したがって、先の『要綱』「資本の価値の増大について」部分が主要な検討箇所という新たな色相を帯びて再び現れてくる。この部分を形成史の中で捉え、その生成と展開とを上からの視角から把握することが重要である。

とはいえ、本稿において、生成と展開のすべてを検討することは不可能である。それ故、本稿では、1840年代後半および1850年代前半のみをもっぱら検討の対象とし、遺憾ながら『要綱』「資本の価値の増大について」部分そのものと、その後の展開の検討とについては、稿末で今後の研究課題をのみ掲げ、それらを展望するだけに留める。不十分ながら、この展望が本稿の第三の課題であり、結において示される。

1840年代後半の検討は、『哲学の貧困』における「公共の富の増大」についての叙述および「賃労働と資本」における「生産的資本の増大」についての叙述を素材とする。そして、その特徴を「価値論に基礎づけられていない蓄積論」と把握し、その内実を確認してみる。これが本稿の第四の課題であり、第I節および第II節第1項において果たされる。

1840年代後半から1851年の「リカード評注」を含む1850年代前半への移行に際しては、マルクスの経済理論の発展においていかなる経緯が介在したのか、これを、リカードの地代論の克服が射程に入ってくる「1851年1月7日付エンゲルス宛書簡」を素材に一瞥してみるのが本稿の第五の課題

²⁵ Der Brief an Engels vom 24. August 1867. In: MEW, Bd. 31, S. 326.

であり、第Ⅱ節第2項において果たされる。

本稿における以上五つの課題のうち、分析視角を明らかにする第二の課題への解答は、以上の序においてすでに明らかにしたところであるから、以下、早速、1840年代後半について検討する本稿の第四の課題に向かうこととしよう。

I 1840年代後半における資本価値の増大把握

1840年代のマルクスの諸著作において、明確に問題設定をしたうえで、生産力の増大が価値・使用価値の生産に、どのような影響を及ぼすのかを検討している史料は、そもそも存在しないわけだが、生産力の増大が使用価値・交換価値双方にそれぞれ異なった影響の生ずることは看過しておらず、その現象を早くから指摘している。本節では、分析視角とした『経済学批判要綱』「資本の価値の増大について」部分の1840年代における生成という視点から、『哲学の貧困』および「賃労働と資本」における類似する文脈を検討する。

1. いわゆる「公共の富の増大」(『哲学の貧困』)

『哲学の貧困。プルードンの『貧困の哲学』への返答』の第1章最末尾で、マルクスは、「富の増進」や「公共財産の累進的増加」を述べて労働者に楽観論を吹き込もうとするプルードンを批判し、そうした富は、ブルジョア個人のものではないとはいえ、ブルジョアジーの富に他ならないと述べ、さらに、次のように続ける。

「経済学者たちは、いかにして現在あるがままの生産関係においてブルジョアジーの富が増進したか、かつまた、さらに増大しなければならないか、ということを証明したにとどまるのである。労働者階級については、彼らの条件が、いわゆる公共の富の増加によって、果たして改善されたかどうか、それを知ることはまだ甚だ異論の多い問題である」[Misère, p.89]²⁶。

(1) 『貧困』におけるリカードおよびローダーデルからの引用

この前半部で述べられている「いわゆる公共の富の増加」、「ブルジョアジーの富の増進」と同一の含意をもつ部分を、『哲学の貧困』内に求めれば、先にマルクスが触れていた、プルードンが「人たる社会という擬制」まで設定してその証明を試みようとした、次の「簡単な真理」の箇所であろう。即ち、

「同一の労働量をもってより大なる商品量を生産させる新発明は、生産物の売買価格を低下させる。故に、社会は、より多くの交換価値を獲得することによってばかりではなく、同一価

²⁶ Misère de la philosophie. Réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon (1847), (Fac-similé), Tokyo 1982, p. 89. 以下、本書からの引用は、本文中に [Misère, p.00] と表記する。

値に対して、より多くの商品を獲得することによって、利潤を得る。発明者にはどうかといえ
ば、競争が彼の利潤を一般的利潤の水準にまで、逐次低下させる」[Misère, p.82]。

マルクスは、ブルードンはこの命題を証明することに成功し得ていないし、さらに、従来の経済
学者たちは、この命題の証明に失敗しているとするブルードンの見方も全くの誤りであると捉え
て、マルクスは、その反証、即ち、リカードとローダーデールのこの問題についての説明を引用す
る。それ故、この引用こそが、先のいわゆる公共の富の増加のいかんにして、に対する経済学者たち
の説明に当たるものとみてよい。

リカードの説明として引用されるのは、『経済学および課税の原理』第20章「価値と富、それら
の特性」の二つの場所からの章句であり、マルクスによって省略記号(……)を用いて繋がれてい
る。

「生産のたやすさを絶えず増進することによって、われわれは、それ以前に生産されたもの
のうちの若干のものの価値を、絶えず減少させる。この同じ手段によってわれわれは単に国富
をますます大ならしめるばかりでなく、なお将来のために生産能力を増大させるのであるが
……²⁷。それまで人間のしていた仕事を、われわれが機械の力を借りてまたはわれわれの物理
学の知識によって、自然的諸能因をして為さしめるや否や、その結果として、その仕事の交換
価値が低下する。粉挽車を廻すのに10人の人間が必要であるとし、風か水の力を借りて、この
10人の人間の労働を節約しうることが発見されるとすれば、粉挽車の活動の生産物である粉
は、その時から、節約された労働の総量に比例してその価値が低下するであろう。そして、社
会はこの10人の人間の労働が生産しうるものの全価値だけ富裕になっているであろう。労働の
〔生活〕維持に充てられる基金は、そのためにいささかも減りはしなかったのであるから」(リ
カード)」[Misère, p.83]²⁸。

この章句にすぐ続けて引用されるローダーデールの文言は、やはり一続きの原文ではなく、『公
共の富の性質と起源およびその増加の手段と原因とに関する研究』²⁹第3章「富(Wealth)の諸源
泉について」の一つの項目「3. 富の源泉としての資本について」の、実は四つの箇所から採られ
ている文言である。

²⁷ Ricardo, *ibid.*, p. 274. マルクスが利用したのは、パリにあって抜粋した「経済学ノート」第IV冊におけるのと同様 David Ricardo, *Des principes de l'économie politique et de l'impôt*, Traduit par F.-S. Constancio. Seconde édition. T. I – II. Paris 1835. であると思われるが、利用し得なかったため、前掲箇所(脚注17)と同じく、Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation, The Works and Correspondence of David Ricardo*, vol. 1, Cambridge 1981を用いた。なお、ノートIVでは、13)とナンバリングして『原理』第20章からの抜粋を記しているが、本文で後にも関説する、本文引用の冒頭文が見出されるのみで、他の箇所は存在しない [Exzerpte aus Xenophon von Athen: Werke, David Ricardo: *Des principes de l'économie politique et de l'impôt*, und James Mill: *Éléments d'économie politique*, MEGA² IV/2, S. 414]。

²⁸ リカードからの引用は、Ricardo, *ibid.*, p. 286.

²⁹ マルクスが利用したのは、パリにあって抜粋した「経済学ノート」第VI冊におけるのと同様。James Lauderdale, *Recherches sur la nature et l'origine de la richesse publique*. Traduit par E. Lagetie de Lavaisse. Paris 1808. であると思われるが、利用し得なかったため、Lauderdale, 8th Earl of (James Maitland): *An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth* (1804), (Reprint), New York 1962を用いた。

ローダーデールは、まず、資本の利潤の源泉について、それは人間が自分の手でしなければならぬはずの労働部分、あるいは、人間の一個人的努力を越え出ている自分自身では行いえない労働部分、これらを機械等をもって、資本が代行・遂行することから生ずる、と述べる³⁰。そしてこの理由を、「機械が人手に代わって行うとき、より低廉な価格で行う」ことに求め、この利潤を追っての資本家間の競争で最終的に利潤を規制する、と言うのである³¹。続いて引用される第三の部分は、この間の事情の説明と見得るが、そのまま引用しておこう。

「四人分の仕事をする機械の発明者に特許証が与えられると仮定してみる。この排他的特権は労働から生ずる競争以外の一切の競争を阻止するものであるから、この特権の存続する間は、労働者たちの賃金が、発明者にとってその生産物に付けるべき価格の尺度となることは明らかである。即ち、〔機械の〕使用を確保するために、発明家は、彼の機械が代行する労賃よりもいくらか少なく要求するであろう。だが、この特権が消滅すれば、同種の他の機械がいくつも据え付けられて、彼の機械と競争する。そうなると、彼は、一般原則に基づいて、彼の価格を取り決めるであろう。その価格をして機械の豊かさいかんによって左右されるものにするであろう」〔Misère, p.84〕³²。

そして、この場合、価格のみならず、利潤がどうなるのかに注目しての説明の引用と思われるのが、続く第四の部分である。即ち、

「使用された基金の利潤は、代行された労働から生じるものではあるけれども、結局、この労働の価値によって規制されずに、他の全ての場合と同様に、資金所有者相互間の競争によって規制されるのである。そして、利潤の程度は、常にこの機能に対して供給された資本の量と資本に対する需要の割合によって決定されるのである」〔Misère, p.84〕³³。

マルクスの省略しているこの引用の冒頭部分をローダーデールに即して見てみると、「外国貿易に使用された基金の利潤は [……]」（下線は橋本）となり、実は、この引用部分は機械に使用されたという文脈のものではないことが分かる³⁴。この点に留意しておこう。

さて、これらのリカードとローダーデールからの引用を一読すれば、それが、ブルジョアジーの富の増進のいかにしての経済学者たちによる説明であることは、より一層明瞭であろう。

リカードからの引用中、冒頭の一文は、『貧困』第2節において、「価格騰貴、生産過剰、その他多くの産業的無政府現象」〔Misère, p.46〕と伴に、「個人的交換に基礎を置く産業」〔ibid., p.48〕において一般化する「労働時間による商品の価値秤量（l'évaluation des denrées par le temps de travail）」〔Misère, p.46〕の一つの側面であるところの「労働の間断なき価値低下（La dépréciation continue）」

³⁰ Lauderdale, ibid., pp. 161/162—マルクスによる第一の引用部分。

³¹ Ibid., pp. 166/167—マルクスによる第二の引用部分。

³² ローダーデールからの引用は、Lauderdale, ibid., pp. 168/169.

³³ ローダーデールからの引用は、Lauderdale, ibid., pp. 181/182.

³⁴ 前三者が「I. 機械を建造し獲得するのに充用される資本部分がその利潤を生産する方法について」の項であるのに対して、これは、「3. 他国の諸商品の輸入、あるいは国内諸製造品の輸出——即ち、外国貿易に充用される資本部分がその利潤を生産する方法について」の項である。

du travail) [ibid.] を述べる際にも引用されていた文言である。そこでは、「これまで2時間で生産されていたものを1時間で生産することを可能ならしめる新発明は、いずれも皆、市場に出廻っている同質の全ての生産物の価値を低下させる」[Misère, p.44] ことが、上のリカードの引用の冒頭文を用いつつ語られ、加えて、「さらに一步を進める」シスモンディの文言の引用 [Misère, p.44/45] の後、それを要約して、「価値を決定するものは、一つの物品の生産に要した時間では決してなく、この物品が生産される時間の最小限であり、この最小限は競争によって確認される、というこの点を強調することが、重要である」[Misère, p.45] と、特別の注意を促している。

このマルクスの強調は、「競争による確認」という後半部分のみならず、前半の、一生産物の相対価値は、その生産物の生産に現在必要な労働時間によって決定されるという法則の方にも、同様、置かれている。したがって、遅くとも『哲学の貧困』の時点において既に、「マルクスの価値概念は、……量的には、投下・支配労働のいずれでもなく、社会的必要労働である」³⁵と理解する大石高久の評価は正当である。

さらに、この後半部分での「競争による確認」を、経済学者の言をそのまま借りることによって敷衍しているのが、先のローダーデールからの引用と言えよう。ここで「労働時間によって価値を決定する学派の首領たるリカード」[Misère, p. 83] と共に、「供給と需要による価値決定の最も熱烈なる擁護者の一人である」[ibid.] としてローダーデールが配されているのは、リカード『原理』第20章の先の引用の冒頭文に引き続いて、リカードが「経済学における誤謬の多くは、[……] 富の増加と価値の増加とを、同じことを意味するものとみなすことから……発生した」³⁶と述べて、ローダーデールを批判しているのに符節を合わせているものとみてよからう。

したがって、既に『経済学・哲学手稿』において「一般的で抽象的な諸定式」に固執し、「私的所有が現実の中でたどってゆく物質的な過程」を「概念的に把握する」ことをしない³⁷として、国民経済学を批判していたマルクス³⁸が、自らの概念的把握を生産力増大の諸影響にも適用して、「労働の中断なき価値低下」という帰結をもその視野に収めたわけである。これは、価値法則の貫徹・実現の仕方についての、この時期のマルクス独自の把握であろう。それは、先にも注意したように、ローダーデールからの引用の最後の部分は、機械に使用された資本ではなく、外国貿易に使用された資本、という文脈であるにも拘らず、自在に用いられていることから窺われる。他よりも高い利潤を得ることが出来るという特権については、新式機械も外国貿易も同様であって、リカードも『原理』第7章「外国貿易について」において同趣旨の議論を展開している。

³⁵ 大石高久「成立史に見る価値概念と疎外論——トゥーフシェーラー所説を中心に——」関東学院大学大学院『経済学研究科紀要』第2号、1976年5月、83頁。

³⁶ Ricardo, ibid., p. 274; ibid., pp. 276/277.

³⁷ Ökonomisch-philosophische Manuskripte, MEW Ergänzungsband Erster Teil [Bd. 40], Berlin 1968, S. 510.

³⁸ 前掲、拙稿「経済学批判の端緒的形成」、103頁参照。

(2) 「個人的交換を放棄」せずに「無政府性なき進歩を欲する」考え方への批判

このような把握、即ち、「社会は、より多くの交換価値を獲得することによって〔……〕利潤を得る」というような、生産力の増大による価値低下と、他方での国富の増大という把握がなされる背後には、マルクスにあっては、次のような、経済学者たちとは決定的に異なったブルジョア社会認識が存在していた。

機械という生産用具そのものに強制されて常により大規模に生産しなければならない産業、大工業の誕生と同時に、個人的交換へ、生産の無政府性（繁栄・不況・恐慌・沈滞・新たな繁栄の繰り返し）の宿命的強制）がもたらされた。このような「人間の生産諸力を増大し、独立した労働の所産に比して剰余をもたらず分業や機械の応用や自然諸力や科学的能力の利用」のための「歴史的諸条件」は、まさに以下の如きものである。即ち、「資本の私的蓄積、近代的分業、自動工場、無政府的競争、賃金制度、要するに諸階級の敵対関係に基づく一切のことが存在すること」[Misère, p.88]である。「利を占める諸階級と衰微する諸階級」、「労働者対資本家、小作農対地主、等々の関係」、「諸階級の敵対的關係に基礎を置く社会的諸関係」[ibid., pp.88/89]。

「無政府性なき進歩を欲する」ならば「個人的交換を放棄」[ibid., p.49]しなければならない。即ち、「現存欲望の総和に対する生産諸力の総和の關係に基礎を置くという一つの協定」である「個人的交換の廃棄宣言」[ibid., p.60/61]を必要とする。しかるに「実直なブルジョアの幻想」[ibid., p.61]という転倒、さらに、「平等主義的關係なるもの、この矯正的理想なるもの」[ibid., p.61/62]という一層の転倒、という認識である。

商品（＝個人的交換）、貨幣、資本（＝資本の私的蓄積、近代的分業、自動工場、無政府的競争、賃金制度、要するに諸階級の敵対関係に基づく一切のこと）——これらの「経済的諸関係」・諸範疇の特殊歴史的な性格が、「生産様式」概念を用いての定式化とあいまって、『貧困』では、一定の範疇展開の体系性を伴って³⁹批判的に把握され、その揚棄が、個人的交換の廃棄をもって展望されているのである。

しかし、ブルジョアジーの富の増加については、プルドンの立言への反証を示すことのみを課題とする[Misère, Avant-Propos]ということも加わってか、経済学者たちの説明の引用のみで、マルクスの積極的な展開は見出されない。また、それが労働者階級にとっては、どのような意味を有しているのか、ということについても、「まだ甚だ異論の多い問題である」とするのみで、第2章でのプルドンの似非弁証法を批判する際（ことに「～の悪い面」への批判）に若干触れられる⁴⁰他は、やはり積極的な展開は見出されない。

³⁹ 商品については、「個人的交換もまた一定の生産様式に対応する。そして、この一定の生産様式それ自体が諸階級の敵対関係に対応するのである。故に、階級対立がなければ個人的交換はありえない」[Misère, p.61]。また貨幣については、前掲、拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論」、166頁、注（3）後半部を参照。

⁴⁰ 特に、第2節「分業と機械」。

2. 「生産的資本の増大」(「賃労働と資本」)

このような『哲学の貧困』において展開されずに終わった課題に取り組み、マルクスの積極的な見解を打ち出しているのが、年末および翌年に行われた数回の講演⁴¹を基に、翌々年、1849年4月に、『新ライン新聞』に掲載された「賃労働と資本」である。

その中で、生産の増大の及ぼす諸影響についての叙述が見出されるのは、第4回と第5回の連載分においてである。そして、連載稿においては、この生産諸力の増大と、それ故に生産構造の変化とは、「資本蓄積過程の必然的随伴物」⁴²として把握されている、即ち「生産的資本の増大」に不可避のものとして位置付けられている(なお、本稿第Ⅱ節の54頁をも参照)。

(1) 文脈の確認

第4回掲載分では、その終わり近くで、「われわれが資本と賃労働の関係の内部にとどまっている場合でさえ、資本の利害と賃労働の利害とは正反対に対立するのである」[MEGA¹ I/6, S.491]⁴³と結論づけていることから明瞭なように、『貧困』で引用しただけに終わったりカードやローダーデールの見解を、自家薬籠中のものとしたうえで、内在的な批判を行っている。その内容とするところは、連載第3回の終わり近くでの「労働者のまずまずの状態にとって不可欠な条件は、だから、生産的資本が、できるだけ急速に増大することである」[ibid., S.486]というのを承けて、「だが生産的資本の増大とは何か?」と問い、「生きた労働に対する貯えられた労働の力が増大することである。労働する階級に対するブルジョアジーの支配の増大である」と応えたのを、一層具体的に示すため、経済学者たちの主張にとって最も有利な状態、生産的資本の増大に伴う労働に対する需要増大に即しての検討である。この状態は、ただ次のことを示すだけであることが、末尾で結論されている。即ち、「労働者階級は、かれらに敵対的な力、彼らを支配する他人の富を急速に増加させ、増大させればさせるほど、それだけ一層有利な条件のもとで、新しくブルジョアの富の増加に、資本の力の増大に従事し、ブルジョアジーがかれらを引きずるための金の鎖を、自ら喜んで鍛えることを許される」[ibid., S.492]、そういう状態でしかないのである。この結論に至る過程は、次のようであった。

「労賃に含まれている諸関連」[MEGA¹ I/6, S.484, S.488]を吟味してゆくのである。まず「実質的労賃」[ibid., S.487/488]、「名目的労賃」[ibid.]が挙げられるが、最も本質的なものは「資本家の利得、利潤に対する労賃の関係によって規定される[……]対比的、相対的労賃」[ibid., S.488]

⁴¹ マルクスは1848年2月に、前年末行った賃労働と資本についての講演の印刷を準備してはいるが、『新ライン新聞』掲載までに、1848年8月30日と9月2日にウィーン第一労働者協会の会合において、やはり賃労働と資本について講演を行っている[大月書店編集部編『マルクス＝エンゲルス略年譜』大月書店1976年、24/25頁および30/31頁]。なお、「賃労働と資本」が『新ライン新聞』に掲載されることとなった経緯については、さしあたり前掲、拙著『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』14頁を参照。

⁴² 佐藤金三郎「産業予備軍理論の形成」大阪市立大学『経済学雑誌』第41巻第1号、1959年7月、17頁。

⁴³ 以下、「賃労働と資本」からの引用は、Lohnarbeit und Kapital. In: Karl Marx, Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Abt. I, Bd. 6, Berlin 1932, S. 473-499からとし、本文中に[MEGA¹ I/6, S. 000]と表記する。

であるとされ、「労賃と利潤との相互関連における下落と上昇とを規定している一般的法則」[ibid., S.489]が示される。即ち、「労賃と利潤とは逆の関係にある。資本の交換価値である利潤は、労働の交換価値である日賃金が下落するのと同じ割合で上昇する。逆の場合は逆である。利潤は労賃が下落する割合で上昇し、労賃が上昇する割合で下落する」[ibid.]。

続いて、この法則に対して予想される異議が検討され、批判されてゆく。一般的な異議として有り得る「労賃が下落したから利潤が増大したというわけではない」との主張に対しては、少なくとも「利潤が増加したから労賃が下落した」ということが言えると逆ネジをくわせている。その他の個々の異議は、利潤増加の源泉を、A. 他資本家との有利な交換に求める（①第三の資本家を欺瞞すること、②労働用具の改良、自然力の新しい利用）、B. 他の商品に対する需要の増大——新市場の開拓・旧市場での一時的な需要増大、を挙げている。A. ①に対しては、資本家階級内部での購着は、結局相殺されること、A. ②に対しては、「機械の改良、生産のための自然力の新しい利用は、与えられた労働時間内に、以前と同量の労働と資本とで一層多量の生産物を創り出すことを可能にするが、以前よりも多量の交換価値を創り出すことは決してできない」[MEGA¹ I/6, S.490]ということ、B. に対しては、「一国のものであれ、全世界市場のものであれ、資本家階級、ブルジョアジーが、生産の純益を彼らの間で、どのような諸比率で分配しようとも、この純益の総額は、常に貯えられた労働が、大体において、直接的な労働によって増加されただけの額にすぎない」[ibid.]ということ、これらを各々指摘することによって、個々の異議を批判している。

ここで注目すべきは、後にも関説する、A. ②に反論する際の、生産力の上昇に関する叙述もさりながら、まずはなんと言っても、利潤の源泉についてのマルクスの把握であろう。それは未だ利潤そのものの源泉についてではない⁴⁴。とはいえ、利潤増大の源泉を、「以前よりも多量の交換価値」と把握し直したうえで、まず、交換・流通の領域から、生産へと移行させ、さらに、生産の中でも機械をはじめとする労働用具や自然力に見出すのではなく、「直接的な労働」に帰着させる把握である。これは、『経済学・哲学手稿』以来の労働把握が、「賃労働と資本」の第3回までの展開を基礎に、経済理論として具体化されてきている一証左である。

（2）第3回までの内容——商品論→剰余価値論→蓄積論という「経済学批判」体系の萌芽——

この基礎を成している第3回までの内容は、次の通りである。まず、第1回で、ブルジョア社会の本質把握と密接に結び付いており、かつまた、講演の聴衆であり、新聞の読者である労働者たちにとって最も関心の高い労賃という表象を据え、その規定因を探る中で、労働という商品の価格たることを示す。次に、第2回では、商品の価格の規定因の分析へと一般化し、『哲学の貧困』での「労働時間による商品の価値秤量」と同じく、無政府的な運動という必然で媒介され「生産費によって

⁴⁴ あるいは、利潤そのものについても妥当すると見てよいのかもしれない。例えば、「生きた労働が貯えられた労働にとって、その交換価値を維持し、増殖する手段として役立つ」[MEGA¹ I/6, S. 484]、「労働者は、彼が消耗するものを補填するだけでなく、貯えられた労働に、それが以前持っていたよりも大きい価値を与える」[MEGA¹ I/6, S. 485]などは、そうした見方を許し、微妙である。

決定される」[MEGA¹ I/6, S.480] こと、「生産費による価格の決定は、商品の生産に必要な労働時間による価格の決定に等しい」[ibid.] ことを明らかにする。ここから労賃に返って、「そのように決定された労賃は労賃の最低限と呼ばれる」[ibid., S.482] ことを示し、さらに、「もっと詳しくわれわれの問題に立ち入ることができる」[ibid.] として、マルクスの本来の意図である第3回以降の展開へと引き継がれる。したがって、第2回は、価格や価値の実体としての労働を示し、またその量的な規定を行い、以後の立論の前提を確保したものと見えよう。第3回では、それを前提に、資本の規定が問題とされ、むしろ経済的形態規定の面に意が払われる⁴⁵。まず、「資本は[……]商品の、交換価値の、即ち社会的量の一総和である」[MEGA¹ I/6, S.483] として、商品および交換価値についての考察を行っているが、これは、いわばこの時点での商品・貨幣論である。また、次に、「ではどのようにして、諸商品の、諸交換価値の総和が資本となるのか？」[MEGA¹ I/6, S.484] に応えて、「直接的な、生きた労働との交換」、「直接的な、生きた労働に対する貯えられた、過去の、対象化された労働の支配」[ibid.] を示し、それが資本の「交換価値を維持し、増殖する手段として役立つ」[ibid.] ことを暴露している箇所は、まさに、この時点での剰余価値論である。さらに、引き続き、「資本と賃労働との間の交換では何が生じるのか？」[ibid.] という問いに応じて、「これによって、労働者は、彼が消耗するものを補填するだけでなく、貯えられた労働に、それが以前持っていたよりも大きな価値を与えるのである」[MEGA¹ I/6, S.485] ということ、「それ故、資本は賃労働を前提とし、賃労働は資本を前提とする。両者は相互に制約し合い、相互に生みだし合う」[ibid.] こと、「したがって、資本の増加はプロレタリアートの、即ち労働者階級の増加である」[ibid., S.486] こと、——これらを述べる展開は、この時点での蓄積論と見ることができる。

したがって、先に(1)で見た、第4回での内面的批判も、内容上は『哲学の貧困』での経済学者たちからの引用を単にマルクス自身が展開してみただけというのではない。やはりその基礎には、『貧困』での経済的諸範疇の序列展開(商品→貨幣→資本)を一層具体化させての、上に見たような第3回における商品論→剰余価値論→蓄積論という「経済学批判」体系の萌芽的形成の存在が前提されていたのである。

(3) 1840年代後半の「経済学批判」体系とその限度

こうした第4回目までの叙述を基に、さらに、生産力の増加が及ぼす諸影響について、『貧困』では未展開であった、その労働者への影響に焦点を絞って、この問題を生産的資本の増大が労賃に及ぼす影響という形で見ているのが、第5回、最後となってしまった連載分である。この部分こそが本稿の当初の関心の的であった。

冒頭で、第4回連載分で仮定していた「生産的資本の増大と労賃の上昇」とが不可分であるとの、ブルジョア経済学者たちにとって有利な設定そのものに疑問の目を向け、そこから、「生産的資本の増大」の実際が検討されることになる。そこでの展開は、おおよそ次のようなものと把握するこ

⁴⁵ 前掲、拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論」163/164頁をも参照。

とができる。

まず、

ブルジョア社会の生産的資本が全体として増大→一層多面的に労働蓄積 = 諸資本の増大

{ 数量的→諸資本の増加→資本家間競争増加。
規模上→一層巨大な武器〔機械〕をたずさえた、一層強力な労働者軍の導入。 }

現に存在する資本の増大という事態の内実が示されるわけである。

次に、今度は、この一方の資本家間競争増加に注目し、資本家間の競争戦に勝利するための方策の吟味がなされる。それは、

競争戦での勝利→破産しない程度での安価販売→安価生産→労働の生産力の増大。

という連鎖の提示である。そして、この労働の生産力の増大のための方策として

{ 分業の増進 } → { 分業が行われる労働者軍の巨大化 }
{ 機械の一層全面的な採用、およびその不断の改良 } { 機械が採用される規模の巨大化 }

を示し、先の資本の増大のもう一方の帰結が必然的に生じ来ることを示す [MEGA¹ I/6, S.492]。つまり、先の資本の増大の存立構造には、資本家間競争の増加を動力として運動する自律的機構があることを示しているのである。

さらに、この機構がいったいどのような結果を惹き起こすのかが、リンネル生産を例にとりて、確かめられてゆく。そのプロセスは、

分業増進 } → 自然諸力の一層有利で大量的な利用→同量の労働・貯蔵労働によって競争
新式機械採用 }

者たちよりも多量の生産物・商品生産→ { 商品の安価販売を可能にする→競争者を打破し、
一層多くの商品売る→一層大きな市場を
その分の販路の一部をもぎ取る
征服することを余儀なくさせる [MEGA¹ I/6, S.493]。 }

この安価販売の際に、「その商品に、競争者たちよりもわずか2～3%だけ安い価格を付けるならば、彼は〔一層の利潤と競争者打破という——橋本〕所期の目的を達する」[ibid.]。しかしながら、そうした「資本家の特権は、長期間にわたるものではない」[MEGA¹ I/6, S.494]。というのは、「競争している他の資本家たちが、同じ機械、同じ分業を、同等または一層大きな規模で採用する」[ibid.] からである。その採用がありふれたものとなってしまうと、それこそ、「リンネルの価格は、その元の生産費以下にどころか、新しい生産費以下にさえ、下落することになる」[ibid.]。

結局のところ、「新しい生産手段の採用以前と同じ状態」[MEGA¹ I/6, S.494] に再び置かれることになる。否、状態は、以前よりも悪化している。つまり、以前の価格以下になっているということに加えて、販売しなければならぬ生産物量は倍加しているからである。それ故、「この新しい生産費に立脚して、同じ競技が再開される」[ibid.]。この反復によって、「生産様式、生産手段は不断に変革と革命を被る」[ibid.]。が、しかし、同時に、「資本家たちが、上記の運動に余儀なくされて、既存の巨大な生産手段を一層大規模に利用し、そしてこの目的のために信用のあらゆる発

条を動かすのに応じて、[……] 恐慌が増大する」[ibid., S.498/499], 「ブルジョアの生産を旧来の軌道から不断に何度も投げ出す」[ibid., S.494] のである。

以上の展開, 「資本家たち相互の産業戦争を大急ぎでスケッチしてみた」[ibid., S.496] ものは、『哲学の貧困』での「供給と需要による価値決定の最も熱烈なる擁護者の一人であるローダーデール」の見解の単なる延長線上にあるのみ見てはならない。まず、そのローダーデールからの引用自体マルクスの取捨選択の上での各所からの合一であったことは既に見ておいた。また、「賃労働と資本」の第2回分での、生産費の規定を本質的であるとする見方、さらに、第3回での資本把握の基礎が確保されたことを考慮に入れれば、論理的な連結の不十分さこそあれ、こうした本質が必然的に貫徹されてゆく過程を描いたものと見るべきである。この過程を「これこそ、商況の変動の内部で、商品の価格を平均させて必然的にその生産費に一致させる法則以外の何物でもない」[MEGA¹ I/6, S.494] と表現したり、「競争は、生産費の法則をもって不断に資本家を追いかける」[MEGA¹ I/6, S.495] と述べるのも、本質が展開される概念次元こそが、現実であり法則であるとする把握に根差すものであって、「まだいちじるしく現象論的である」⁴⁶ などと見ることは決してできない。

さらに、生産的資本の増大に伴う生産力増大の影響を、生産物生産の不可逆的增加とその価値(生産費)の終極的低下として把握するのみならず、資本家間の競争に媒介されてではあるが、そうした生産力増大の二面的影響の究極の現象として恐慌を位置付けている点は、後の「経済学批判」体系、ことにプランとの関連で興味深く、その萌芽的形成と言ってよい。また、恐慌時には、増大した富、生産物、生産力さえもが破壊される点を重視していることは、ブルジョア生産の特殊歴史的性格、即ち、生産物(富)の生産を目的とするのか、価値生産を目的とするのか、について、両者への生産力増大の影響の相違を契機として、その認識を一層深めつつあると見てよい。

しかしながら、他方、論理的連結の不十分さ(価値論・剰余価値論・蓄積論の未完成——とりわけ、労働の二重性把握の欠如、労働力範疇の未完成、剰余価値概念の未析出、価値論・剰余価値論に基礎付けられた本格的蓄積論の欠如)は、次のような限度となって現れる。

生産力の増大による一時的な利潤増大の源泉は、先に見たように、生産、それも労働に帰着させて捉えてはいる。しかしながら、生産費の法則が貫徹して生産物の価値低下が生ずると述べる際、それがどのようにして低下するのかは、資本家間の安価販売合戦という競争の面から跡付けられるのみであって、生産の場で、どのようにしてその生産費が低下するのかという説明の仕方にはなっていない。また、生産力の増大の及ぼす影響のうち、素材的な増大は自明として、価値的な変化、つまり、需給・競争論と生産費の法則の貫徹とが、どのような連関をもって、終極たる商品の価値低下に至るのかが判然としていないのである。このことは、賃金の低下についても同様であって、それは、労働者間の競争の激化から、いわば需給論的な要因を押し出すだけで、労働＝商品そのものの価格がどう変動するのかという問題設定にはなっていない。

⁴⁶ 前掲、佐藤金三郎「産業予備軍理論の形成」、16頁。

さらに、生産力増大を不可分とするそもそもの生産的資本の増大という事態が、どのようにして惹起されるのかが、大規模な資本投下を促迫される競争戦から、素材的に把握するのみで、その価値的増大は不問にされている。これはむしろ、国民経済学的前提をそのまま受け取っているためなのかもしれない。

これ以上の「賃労働と資本」の限度、とりわけ労賃規定について——したがって『哲学の貧困』では未展開であった、公共の富の増大の労働者への影響について——は、節を改めて、続く第Ⅱ節「価値論に基礎づけられていない蓄積論」の内実とその克服への萌芽、において見てみることにしよう。

Ⅱ 「価値論に基礎づけられていない蓄積論」の内実とその克服への萌芽 ——1840年代後半と1850年代前半との相違——

前節において見てきた1840年代後半のマルクスの経済学研究とその成果については、次のような特徴付けが一般的になりつつあるように見受けられる。即ち、

「40年代後半のマルクスの理論の性格は、労賃の敵対的関係の把握に力点がおかれ、かかる資本関係を支えるところの商品関係の分析は、少なくとも未完成であるということができる。これと対応して、労賃は、まず、労資の敵対関係そのものの一表現として、利潤との対抗関係においてとらえられてはいるが、労働力の商品化のメカニズムの把握はなされていない。かくして、商品への下降は未完成であり、まして、貨幣の資本への転化の過程の解明は、未解決のままに残されていたのである」⁴⁷。

このような特徴付けを端緒として、さらには、「これを、誤解をおそれずにあえていえば、価値論なき剰余価値論——資本蓄積論とでもいえようか」⁴⁸ という特徴付けにも至っている。

このようなマルクスの思想形成（とりわけその経済学〔経済学批判〕の形成過程）を把握する際の基準設定は、「資本－賃労働の対抗、その基礎過程分析たる剰余価値論、資本蓄積論は、厳密な価値論、貨幣論の基礎上においてのみ、真に科学性をもちうるものである」⁴⁹ ことから、誤りのない方向を指し示しているということができよう。

本節第1項では、上の基準からする1840年代後半の評価をさらに深めて考えるために先に見てきた『賃労働と資本』や「労賃」断片などを素材としながら、資本蓄積と労働＝商品の価値規定との連関を軸に見てみることにしたい。それによって、40年代後半におけるマルクスの経済学批判の限度を一層よく示せればと思う。

⁴⁷ 服部文男「マルクス労賃論の成立過程について——労賃論と資本蓄積論との連繫——」東北大学『研究年報「経済学」第23巻第2号、1961年11月、16/17頁。

⁴⁸ 中川 弘『『経済学・哲学草稿』と「ミル評註」——「疎外された労働」を中心とした一考察——』福島大学経済学会『商学論集』第37巻第2号、1968年10月、18頁。

⁴⁹ 同前17頁。

1. 1840年代後半の「価値論に基礎づけられていない蓄積論」の内実

『賃労働と資本』の第5回連載分などを中心にして、1840年代後半におけるマルクスのブルジョア社会把握の核である賃労働と資本との階級対抗関係を再構成してみれば、それは、次のような図式として描き得る。

生産力の増大（＝生産的資本の蓄積）→大工業（機械の応用・分業の増大）→労働の単純化
→労働者人口増大（＝婦人・児童労働の新規参入）→労働者階級間の競争激化（＝雇用に対する労働者の需要増大）→相対的（対資本家階級関係）賃金の低下。

このようなプロセスをたどって、生産力の上昇を不可分とする生産的資本の増大は、賃金の低下を導くわけであった。一見したところでは、生産過程への注目はあるものの、賃金規定については、需給論的と言ってよいものである。しかし、賃金とはそもそも労働の価格であり、他の諸商品同様、その生産費によって決定される。つまり、労働者を維持し、労働者として育成するために必要な費用であって、生存費と繁殖費であった。そしてこれが労賃の最低限と呼ばれるのであった。とするならば、先の労賃低下に至る一連の過程においては、この生産費・繁殖費が低下していなければならないはずである。それ故、これを生起させる次のような過程が、先の過程と伴に進行している。それは即ち、大工業による次の三様の帰結である。つまり、①労働の単純化→労働の修得費の低廉化 [MEGA¹ I/6, S.496]。②競争を媒介としてあらゆる商品の価格をその生産費の最低限へと向かわせる [MEW, Bd. 4, S.454]⁵⁰。③より安い生活手段を生み出す [ibid., S.455]。

①については明らかであろうから、②・③についてのみ検討する。②それ自体は、「同一労働量をもってより大なる商品量を生産させる新発明は、生産物の売買価格を低下させる」と述べた『哲学の貧困』以来のものと言ってよい。が、しかし、マルクスは他方で次のようにも述べる。

「〔生産力の増大を前提して〕全ての商品が安くなれば——もっとも、生活必需品 (die unmittelbarsten Lebensmittel) については、そのようなことは起こらないのだが——労働者は、つぎはぎだらけのボロをまとい、彼の貧困は文明の色彩を帯びるようになる」 [Arbeitslohn, MEW, Bd. 6, S.541]⁵¹。

それ故、マルクスは、生活必需品については、もっぱら、③の文明の色彩を帯びた貧困の経路を想定しているように思われる。安価な賃金でも生活を維持できる、大工業による安価な代替物の生産である。例えば、蒸留酒の原料については、ぶどう酒の絞りカスから火酒への [ibid., S.539 u. S.543/544]、衣類については、羊毛・麻から木綿への [MEW, Bd.4, S.455] 代替である。生活必需品においては、生産力の上昇にも拘らず、ブランデー、羊毛等自体の価格は低下せず、より安価な代替品による、労賃低下への対応という説明になっているように思われるのである。今風に言えば、

⁵⁰ Rede über die Frage des Freihandels, gehalten am 9. Januar 1848 in der Demokratischen Gesellschaft zu Brüssel, MEW, Bd. 4, S. 454. 「自由貿易問題についての演説」からの引用は本書からとし、本文中に [MEW, Bd. 4, S.000] と表記する。

⁵¹ Arbeitslohn, MEW, Bd. 6, S. 541. 以下、手稿「労賃」からの引用は本書からとし、本文中に [MEW, Bd. 6, S.000] と表記する。

これまではそれなりの品質の日用品を購入していたのが、“百円均一”店の商品に代替されるようなものであろうか。こうした見方は『ドイツ・イデオロギー』の「工場式の見せかけの生産や品質の粗悪化」[MEGA² I/5, S.12.]にもすでに見出されるように思われる。

それは、「生活必需品（最も直接的な生活諸手段）」とは、もっぱらその内実が農業生産物、とりわけ穀物（小麦）であることに起因するように思われる。即ち、農業（穀物）生産には、生産力の増大もそれ程、影響を与えない、あるいは、与えても穀物価格の低下として現れてこない、という考え方と言えよう。このような想定は、リカード地代論に固有のものであった。

リカード地代論にあつては、穀物価格は、生産力増大（＝資本蓄積増大）の際、次のような経過をたどって、むしろ上昇するのである。

資本蓄積→労働者に対する需要増大→賃金高→労働者の生活安定→（結婚→出産→）人口増→食料品に対する需要増→穀物価格高→穀物増産（劣等地耕作）→土地耕作困難→投下労働量増→穀物価格上昇→{地代高騰，資本家・労働者貧困}

こうしたリカードの推論に、マルクスは相当の疑問を抱きつつも⁵²、一応踏襲していたのではなからうか⁵³。というのは、まず、リカード地代論は、その価値論の不可分の契機をなすものであり⁵⁴、価値論を受容するうへは、同様に受容することにならざるをえない側面を持っていたと思われるからである。また1848年1月9日にブリュッセル民主主義協会で行われた「自由貿易問題についての演説」の中で、反穀物法同盟が、借地農および農村の労働者からの支持を確保するために、穀物法廃止がイギリス農業に及ぼす有益な影響を論ずる三つの論文に賞を与えたことを述べ、それら三論文の内容を紹介している。そのうち三つ目の大工場主グレッグによる大借地農向けの論文の紹介に際して、最劣等地耕作が地代に与える影響と、それへの穀物法廃止の影響について、リカード地代論とほぼ同じ内容を示し、「グレッグ氏のことばを理解できるようにするには、以上のように考えることが必要だった」[MEW, Bd. 4, S.447]と、マルクスの独自の改変による紹介である旨、断り書きを行っている。このような紹介の仕方自体、リカード地代論をさしあたり妥当なものとして受容している傍証となるのではなからうか。

労働の価格の主柱を成すべき食糧品の価格は低下しない。むしろ、生産力の増大に伴って上昇し

⁵² エンゲルスの「国民経済学批判大綱」およびマルクスの手稿「労賃」におけるマルサス人口論批判については、本節の第2項を参照。

⁵³ W. ヤーンとD. ノスケは、40年代マルクスの意義と限度とを5点に整理しているが、その5点めで次のように述べる。即ち、「リカードとは異なり、マルクスは、地代は土地所有のブルジョアの形態の理論的表現ではないということに認識した。しかしながら、マルクスは、当初は依然として、社会的発展の経過と共に、ますます一層劣等な地片に移行されねばならないという、リカードの過る命題を受け容れていた」Jahn, W./Noske, D.: Fragen der Entwicklung der Forschungsmethode von Karl Marx in den Londoner Exzerptheften von 1850 – 1853. In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 7, Halle (Saale) 1979, S. 22/23.

⁵⁴ 「リカードは、土地所有、即ち、地代は商品の相対的価値を変えることができないであろうということ [……] を証明しようと努める。この主張の正しいことを証明しようとして、彼は彼の有名な地代論を公にして [……]」Misère de la philosophie. Réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon (1847), (Fac-similé), Tokyo 1982, pp. 22/23. 但し、この文それ自体は、リカード価値論と地代論の不可分性を示していることに異論はないとしても、これに対して当時のマルクスがどういう対応をとっていたのかについては、判断が難しい。

さえする。しかしながら、現実にあつては、労働者の状態は悪化し、相対的賃金は低下している。これを説明するためには、当初、リカードの価値論の貫徹でもって、地代論をも動員して行おうとするが、そもそも地代論のために説明不能となり、結局、別の論理による解決となる。これが、当時のマルクスの需給論的な賃金低下論であつたのではなからうか。

それ故、1840年代後半における、景気変動を絡めての、労賃の需給論的規定は、一方でリカード価値論を受容していながら、その貫徹が為されておらず、一見不釣合に映るが、そうではなく、むしろリカード価値論をその補完たる地代論（実態は蓄積論だが）と共に厳格に貫徹して労賃を説明しようとした挙げ句⁵⁵、現実の労賃低下との断絶に直面し、現実を優先させて規定せざるをえなくなる、という経緯からの立論なのではなかったろうか。つまり、そもそも価値論を当初から放棄したうえでの一面的な需給論的規定ではなかったのではないか、との推測である。

当時のマルクスの賃金低下論をまとめてみれば、おおよそ次のようなものとなるであろう。

まず、マルクスの賃金低下論では、労賃の最低限というものは比較的固定的であるとする前提が置かれている。その最低限の内容を成しているのは、①「労働者の絶対的な消費」[Arbeitslohn, MEW, Bd.6, S.539]⁵⁶、「最も不可欠な生活資料」[ibid., S.543]と、②「相対的消費」,「それ[絶対的な消費]を越えたわれわれの享樂の価値」[ibid., S.539]の合計である。したがって、この労賃の最低限というのが、労働者の生理的生存の限界を画するものなどでないことは自明であろう。そうした生理的限界は①の方のみである。労賃の最低限が比較的固定的な額であるのは、先にも示したように、最も不可欠な生活手段である穀物をはじめとする農業生産物の価格が、リカードの地代論を踏襲しているために、低下しないとみているからである。しかしながら、その固定性は、あくまで相対的なものであるということをも捉えている。

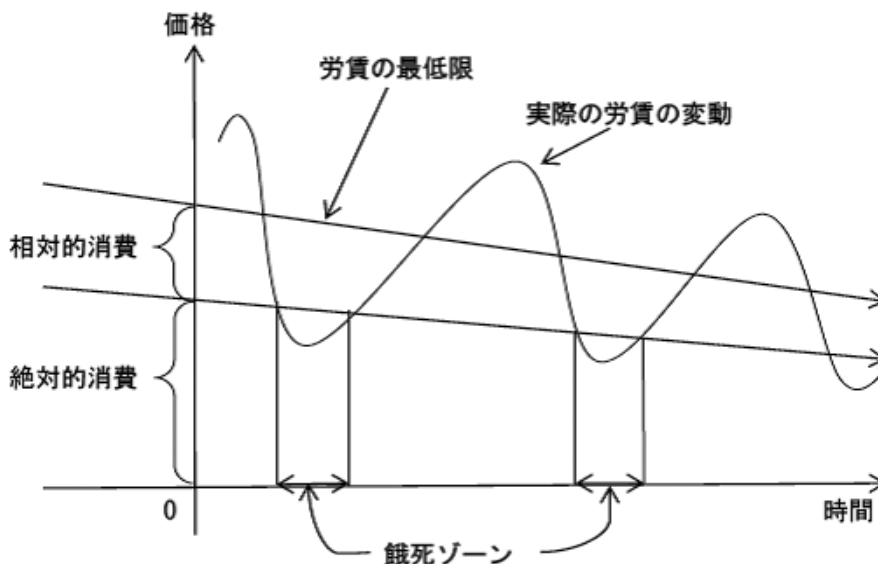
国により、また歴史的にも変化するものである、との明言 [ibid., S.543]であつて、それは次のような経過をたどれば、もっぱら低下してゆく。即ち、②の「享樂」に属する蒸留酒がブドウ酒の絞りカスから火酒へと、また、①の「不可欠な消費」に属する主食がパンからジャガイモへと、代替されてゆく場合である。

以上を、全階級的・長期的な、したがって生産費の法則が貫徹する、労賃の最低限（労賃の平均価格・平常価格）の変動と、他方、需給関係・景気変動によって、この最低限を中心として決ってくる、個々の労働者の実際の賃金変動とを、併せて図示してみれば、「(表1) 労賃の最低限 (1840年代後半) 概念図」のようであろうか。

⁵⁵ リカード地代論・マルサス人口論への批判と、他方でのリカード地代論による諸商品の価格規定への模索という、リカード地代論に対するアンビヴァレントこそが、リカード地代論の「証明されるべき命題」と「証明に際して挙げられた根拠」との弁別へと向かわせることになるのではないか。なお、後論51～55頁、および、脚注71をも参照。

⁵⁶ シェルビュリエからの引用にあるものだが、マルクスも同意してのものと判断する。

(表1) 労賃の最低限(1840年代後半)概念図



したがって、マルクスは、まだこの時点では、労賃の最低限そのものが、生産力の増大によって、生活必需品の代替物ではなしに、当初の生産物自体の価値低下を通じて、低下してゆくという、『資本論』でいえば相対的剰余価値の生産にあたる把握には達しえていない。剰余価値論の基本的構成要素が欠如しているからには、思うに当然のことではある。そうした要素抜きで、さしあたり相対的剰余価値生産に類似の方向への道を示し、そこから剰余価値論の生成へと向わせることになるのは、リカード(差額)地代論という当面の障害物であったものの理論的克服である。というのは、リカード地代論の推論の連鎖を裏返して、資本蓄積(=生産力増大)の結果、農業生産物の価格が低下する旨、示されれば、労働=商品の価値規定が価値論に立脚して一層厳密化されてゆくからである。さらに、地代や特別利潤と、利潤そのものあるいは剰余とが、全く異なる次元に属することをも示し、そこから、本来的な剰余価値論、さらには相対的剰余価値生産に伴う労賃の低下の解明へと向ってゆくことになるからである。

項を改めて、次に、この動きへの開始点を見て、本項の第五の課題に応えることとしよう。

2. 「1851年1月7日付エンゲルス宛書簡」におけるリカード地代論の克服

このようなりカード(差額)地代論が克服されるのは、「1851年1月7日付エンゲルス宛マルクス書簡」⁵⁷においてである。

リカード地代論の詳論(穀物価格の上昇・人口論)が、疑問であるとの声は、既に早くから出て

⁵⁷ Der Brief an Engels vom 7. Januar 1851. In: MEW, Bd. 27, S. 157-162. なお、この手紙およびこれに対するエンゲルスの「1851年1月29日付返信(Der Brief an Marx vom 29. Januar 1851. In: MEW, Bd. 27, S. 170-172)」からの引用は、本文中に「Marx, MEW, Bd.27, S. 000」ないしは「Engels, MEW, Bd.27, S. 000」と表記する。

いたようであり、ことに1830年代には、既にその影響力を弱めていた。即ち、

「1835年までに、マルサスの人口理論は、拒否されはしなかったにしても、その短期的な内容を決定的に刈り取られてしまったので、事実上、何も残らなくなっていた。マルサスの人口学説に対する信頼の減退とともに、リカード体系はその理論的厳密さをほとんど失い、それが問題にしていた主要な経済変数の運動の強力さや方向を明記することが不可能になった。事実、リカード経済学の弱点が初めて決定的に明らかになったのは、人口論争の分野においてであった」⁵⁸。

また、マルクスの経済学研究開始に大きな影響を与えたとされるエンゲルスの『独仏年誌』所収論文「国民経済学批判大綱」には、「人類の自由にできる生産力は無限である」⁵⁹、「科学の進歩は人口の増進と同様、無限である [……]。科学にとって不可能なことがあるか？」⁶⁰と、いち早いマルサス人口論批判が見出される。さらに、先にマルクスはリカード地代論に相当の疑問を抱いていたと記したが、その基底にあるマルサス人口論と共に、手稿「労賃」において次のような批判を加えている。救済案として示される第三の提案、「マルサスの理論」を「最高にばかげたこと」と特徴づけたうえで、「生産力の増大が同時に労働者とその雇用手段との不均衡を拡大させるということ、このことは近代工業の性格と資本の本性に根差しているのである。それは、それ自体として考えられた生活資料の増大や人口の増加とは無関係なものである」[Arbeitslohn, MEW, Bd. 6, S.552]との叙述である。とはいえ、ここでの批判はリカードの地代論そのものを内在的に克服したうえでのものではなく、近代工業の性格としての産業循環からする需給論的性格であることは詳論を要しないであろう。

1840年代、50年代には、このようなリカード批判は相当に一般化するようであり⁶¹、雑誌『エコノミスト』1850年12月14日号にも、前号の記事⁶²に対する読者の手紙⁶³という形で現われている。マルクスはこの記事に接し、抜粋を行い⁶⁴、当該エンゲルス宛の書簡を書くことになるわけである。

その書簡の要点を明らかにしているのは、これに対するエンゲルスの1851年1月29日付返信である。「[リカードの地代論では] 証明されるべき命題は明らかだったが、証明に際して挙げられた根拠は、この命題そのものには無関係だった」[Engels, MEW, Bd. 27, S.170] というのである。「証明

⁵⁸ Blaug, M.: Ricardian Economics; A Historical Study. 馬渡尚憲・島博保訳『リカード派の経済学—歴史的研究』木鐸社1981年、175頁。

⁵⁹ Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie. In: MEW, Bd. 1, S. 517.

⁶⁰ Ibid., S. 521.

⁶¹ 「1851年5月19日付マルクス宛エンゲルス書簡」[MEW, Bd.27, S. 259] で紹介されているロートベルトゥスの著作 *Soziale Briefe an von Kirchman. Dritter Brief: Widerlegung der Ricardo'schen Lehre von der Grundrente und Begründung einer neuen Rententheorie*, Berlin 1851の出現も、そうした状況を反映するものであろう。

⁶² *The Economist, Weekly Commercial Times, Bankers' Gazette, and Railway Monitor: A Political, Literary, and General Newspaper*. 1850: December 7, No. 380, (Agriculture. The Adjustment of Farming Contracts.), p. 1351.

⁶³ Ibid.. 1850: December 14, No. 381, (Agriculture. Relations of Landlord and Tenant.), p. 1379.

⁶⁴ Schrader, F. E.: *Restauration und Revolution – Die Vorarbeiten zum „Kapital“ von Karl Marx in seinen Studienheften 1850–1858*, Hildesheim 1980, S. 223/224. Anmerkung 53.

されるべき命題」とは、「リカードが……地代をいろいろな土地部類の生産性の差として定立」[ibid.] していることである。マルクスの書簡に即して言えば、「リカードが最も簡単な命題によって立てている地代の法則」[Marx, MEW, Bd. 27, S.161.], 具体的には、地代は「土地生産物の生産費と価格の差額」, 「最劣等地がその費用（借地農の利潤や利子は常に費用に算入される）を回収するために売られなければならない価格と、最優等地が売ることのできる価格との差額」[ibid., S. 157] だ、ということである。

「証明に際して挙げられた根拠」とは、エンゲルスによれば、（１）土地の劣等化以外の諸契機の否認、（２）農業の進歩の無視、（３）土地の劣等化を結局は全く無視しての、一定の耕地に投ぜられる資本の収益増加への寄与の漸減の主張 [Engels, MEW, Bd.27, S.171] である。マルクスの書簡に即して言えば、「リカードの詳論」[Marx, MEW, Bd. 27, S.161] であり、具体的には、次の「三つの命題」[ibid., S.157] である。即ち、（１）人口が土地からより多くのものを取らなければならなくなるのに比例して、土地は劣悪化するということであり、マルサス人口論の現実的基盤を成すものである。（２）地代が上昇しうるのは、ただ穀物価格上昇の際のみであるということ。（３）一国全体の地代総額の増加は、ただ非常に多くの相対的により劣等な土地が耕作されるようになることでのみ説明可能としていること [ibid.], 以上３点である。

ところが、先の『エコノミスト』掲載の「土地所有者と借地農との関係」と題された「ある土地所有者にして農民」の編集者への手紙は、この三命題と矛盾する事実を指摘した。即ち、

「[……] 賃貸しされる土地の価値が穀物、とりわけ小麦の価格に依存しているというもののほど、一般的でありかつ誤ったものはなかったと常に思い続けてきた。[……] しかしながら、過去35年間に、戦争終了以来ずっと、小麦は不規則ではあるけれど、漸次的に1クォーター90シリングから下落して、例えば（1847年末までには）50シリングになってきたのに対して、他方、土地の地代は、その間、確実に上昇したということは、良く知られた、疑い得ない事実である」⁶⁵。

『『エコノミスト』は、この展開を、土地の改良、例えば排水設備によって説明する。総生産物が対应的に増加するために、価格の低下にも拘らず、地代が上昇しうる」⁶⁶。マルクスは、その記事の指摘する事実を次のように三点にまとめている [Marx, MEW, Bd.27, S.158]。（１）文明の進歩は、一層の劣等地耕作を惹起するのは事実だが、「これらのより劣等な土地も、科学や産業の進歩のおかげで、以前の優等地に比べて相対的に優れている」こと。（２）1815年以來、穀物価格は低下し、穀物法廃止直前にはさらに低下している。それにも拘らず、地代は絶えず上昇している。これはイングランドのみならず、必要な修正を加えれば大陸諸国にも妥当する。（３）どの国でも、穀物の価格低下と一国の地代総額の増大が同時に生じている。

⁶⁵ The Economist, 1850: December 14, No. 381, (Agriculture. Relations of Landlord and Tenant.), p. 1379. ちょうどマルクスの抜粋した部分のみを直接『エコノミスト』から引用したが、マルクスは、例のごとく、そのまま抜粋しているのではない。

⁶⁶ Schrader, ibid., S. 223.

こう見ると、「証明されるべき命題」、リカードの地代論の基本命題までもが誤っているかのよう
に思われるのだが、マルクスによれば、そうではなく、「証明に際して挙げられた根拠」(2)(3)
が誤っているのであって、「地代の法則を農業一般の生産性の進歩と矛盾しないように調整する
ということ」[ibid.]こそが、「主要な問題」となる。と言うのも、それによって、1. 歴史上の事実
が説明可能となるし、2. 単に人間だけでなく、土地にも及ぶマルサスの劣等化理論が排除される
からである。

この説明をマルクスは次のような設例によって行っている⁶⁷。

(表2) マルクスの設例とその説明⁶⁸

(1) 前提条件

(単位)	生産費 シリング	収穫高 ブッシェル	価格 シリング/q.b.	収益 シリング	地代 シリング
最優等地	130	20	7	140	10
最劣等地	130	[18 $\frac{4}{7}$]	7	[130]	[0]

(2) 農業の一般的な改良(科学・産業進歩, 人口増加)後

(単位)	生産費 シリング	収穫高 ブッシェル	価格 シリング/q.b.	収益 シリング	地代 シリング
最優等地	130	30	5	150	20
最劣等地	130	26	5	[130]	[0]

1. 農業の一般的な改良による(1) → (2)への設定は可能。

不可能の際は、つまり、(2)の最劣等地で26ブッシェル収穫しない際は、価格は7シリング
から5シリングにまでは下がらない。

2. (1) → (2)の際、全ての土地において、一般的豊度は増大。しかし、20シリングの地代
は存在。=リカードの地代論の基本命題は妨げられていない。

3. (1) → (2)を維持する要因は、ただ供給と需要両者の次のものの満足のみ。

1) 需要：生産増大分の吸収可。

2) 供給：5シリングの価格を保持する生産性の維持・停滞。

ここからマルクスは以下のような帰結を導く。(1)土地生産物の価格が低下しても、地代が上
昇するということがあり得ることになるわけだが、その場合も依然として、最優等地における生産
費と穀物価格との差額が地代を成すというリカードの地代に関する基本命題は侵害されていない。
(2)そうした基本命題が前提するのは、リカードの言う土地豊度の低下を前提するというもので
はなく、ただ農業生産力の増大による土地豊度上昇は、個々の土地に各々異なった影響を与えるが

⁶⁷ こうした設例は、『エコノミスト』論説からの抜粋へ付したマルクスの評注にあるものとほとんど同一である。

⁶⁸ このような表示は小川浩八郎『経済学と地代理論』青木書店1979年、第4章「1851年におけるマルクスの地
代論書簡」、87頁における表示に依拠し、それを踏襲している。

ために、依然土地豊度の相違を残すということであり、またここから、それらの土地に投下される資本の成果も異なる、ということが前提なのである。(3) 一国全体の問題では、地代総額は、穀物価格が一般に低下しても、増大しうるといふこと。だから、この場合問題となるのは、最優等地・最劣等地だけではなくて、むしろそれら両者間にある土地の豊度がどのようなものであるかなのである、ということ。したがって、こうしたことは、最優等地の地代率にはそもそも無関係であること。

これらの帰結を抜き出し得た書簡の持つ意義は、次の2点にまとめられる。

マルクスのまとめ方とは逆の順序になるが、まず第一は、リカードの言うような土地豊度の相対的低下、したがって同じ労働で生産される物が次第に少なくなってゆくという懸念が、ブルジョア的生産の廃止後にさえ残るように思われるが、科学・産業の進歩、その源泉たる人口の増大によってこそ、農業での生産力が高められるため、そうした懸念は杞憂にすぎないことを論証したことである。この懸念こそ、「単に人間だけでなく土地にも及ぶマルサスの劣等化理論」そのものであって、ブルジョア的競争が無くなってしまうと人間は怠惰になるといふ人間の劣等化理論をばまさに土地へと拡大したものであろう。この理論的虚偽が確証され、謬論として排除されたのである。先に見たエンゲルスの「国民経済学批判大綱」におけるマルサス人口論批判と同様、マルクスも人間、そしてその増加こそが生産力の源泉であると見ているわけである。こうした認識が、最終的には、マルクスの、「生産諸力の増大と生産構造の変化を資本蓄積の必然的随伴物とみる」把握⁶⁹にも連なっており、この点において、ブルジョア経済学とは決定的にその袂を分かつのである。また、最も自然的でかつ超歴史的であるかに見える農業生産にも、そのブルジョア的な独自性(制約性)を見出した点は、剰余価値生産の理論化にとっても大きな一歩前進であったと言えよう。

第二は、「いろいろに違う生産費のいろいろな成果について、価格が平均されることによって地代が生み出される」というリカード「地代論における眼目」[Marx, MEW, Bd.27, S.161]を、理論的破綻から救っていることである。そして、これを「市場価格の法則」[ibid.]と見て、単に地代論にのみ妥当するものではない、と一般化させている。したがって、これは、また、『哲学の貧困』や「賃労働と資本」におけると同じく、「ブルジョア的競争の法則に他ならない」[ibid.]として、あくまで特殊歴史的にのみ存在するブルジョア社会の否定的側面と認定されることになる。

この書簡におけるマルクスの進展のうち、本稿の関心から注目しておきたい点は、まず、生産力の増大を、人間の進歩・歴史の進展の必然的な随伴物と把握し、それを農業部面にまで貫いたことであり、次に、それ故、労働者の生活手段の主要財貨たる穀物をはじめとする農業生産物の、生産力増大に伴う価値低下を確認したことである。これは、工業生産物における「労働の不断の価値低下」の農業部面への拡大であろう。「市場価格の法則」という一般化にそれを見得る。したがってまた、逆に、工業部面での生産力上昇→特別利潤獲得というプロセスを、今度は地代論に類比さ

⁶⁹ 前掲、佐藤金三郎「産業予備軍理論の形成」、17頁。

せて、「差額利潤」⁷⁰として説明してゆく道が拓かれたということである。つまり、特別利潤は、地代同様、実体的には新たな価値生産ではなく、他資本からの流入であるという認識方向への移行である。こうして、利潤そのものと、特別利潤とが区別される可能性が与えられているのであり、またここから利潤そのものを、剰余として把握し、その発生機構を問う土台も生成してゆくのである。

また、他方、この地代論研究は、労賃の研究とも密接に関連しており、この方面において、労働力範疇および労働力の価値規定の生成への整備が進行しつつあるように思われる⁷¹。

次に、節を改めて、この書簡に引き続く1851年4月から5月半ばにかけて執筆されたと推定される、一連の「ロンドン抜粋ノート」のうち、第Ⅷ冊における「リカード抜粋」⁷²を検討する。この抜粋において、生産力の増大が価値・使用価値生産に及ぼす影響の相違に着目しながら、価値・資本の増大の問題設定を行い、それを剰余価値論として解いてゆくこととする萌芽（剰余価値論析出の

⁷⁰ Schrader, *ibid.*, S. 152.

⁷¹ このような問題視角から賃金論の形成過程を見ようとするのが、K. シュトゥーデである。彼は次のように述べている。

「『賃労働と資本』および手稿『労賃』は、マルクスの賃金論の仕上げの途上における一里塚であった」が、「さらに、1850年から1853年にかけて、この問題について、とりわけステューリング、ステュアート、ミル、ブキャナン、ビュッシュ、パートン、スミスそしてマルサスの著作から抜粋を行った。こうした諸問題について見てゆくあらゆる折に、「ロンドン抜粋ノート」におけるマルクスにとっては、資本家的生産過程における生産性の役割についての取り組みと、とりわけ差額地代の問題が中心となっていた。[……] それ故、上記の著者たちの賃金論が原理的に誤っていると既に批判されてはいるのだが、地代の問題の[……] 根本的解決は、しかしながら、1850年の終りから1851年の初めによく行われる[……]。これによって、資本と労働との間の諸関連の全体性の研究の途上で重要な一歩が進められる。[……] マルクスは、賃金の問題の考察に際して、既に獲得された認識水準を基礎にしている。そのため、マルクスは、さまざまなブルジョア的な議論に対して、どの場合も、彼の見解を表明することなしに、論評を付けずに引用している[……]」[Stude, K.: Zur Entwicklung der Marxschen Lohntheorie in den "Londoner Exzerptheften" (1850 – 53) und den "Ökonomischen Manuskripten 1857/58". In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 8, Halle (Saale) 1979. S. 48]。

しかしながら、「リカード抜粋」等から、引用に際してのマルクスの見解や意図がある程度推測可能であるとし、その際のマルクスにとっての次のような「緊密な連関にある二つのかなり大きな問題領域」を示している。即ち、

「第一に、マルクスは、労働力の供給と需要による規制という考え方を追求した。ここから、マルクスは、マルサスやパートンそしてリカードとの対決を経て、賃金基金は固定した量ではなくて、むしろさまざまな事情によって規定されるという一層深い基礎付けに到達する。それと共に、他方では、彼は、労働力商品の価値は決定的に歴史的＝道徳的要素に依存するという彼の後の定式化にとって重要な示唆を受け取っている」[Stude, *ibid.*, S. 49]。

そして、シュトゥーデは、引き続き行論において、この2点について検討している。

⁷² 1851年春の「ロンドン抜粋ノート」第Ⅷ冊における「リカード抜粋」からの本稿における引用は次の2つの文献からとする。1) Aus Exzerptheft VIII : Ricardo (David). On the principles of political economy and taxation³, London 1821. In: Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857 – 1858. Anhang 1850 – 1859, Berlin 1974. 2) Exzerpte aus David Ricardo: On the principles of political economy. In: MEGA² IV/8, Berlin 1986. 後者2)では「ノート」の頁数表記のいくつかが脱落しているように思われる。1), 2) 双方の典拠の頁数表記は[S. 000; S. 000]のように、[]内に;(セミコロン)を挟んで、[1];[2])の順に記載し、また、1)のみの記載の場合には、[1] S. 000]と記載してある。

端緒)が、その構成諸要素と共に、出現してきていることを確認して、本稿の第一の課題に応えることとしよう。

Ⅲ 1850年代前半(「ロンドン・ノート」第八冊「リカード抜粋」) における資本価値の増大把握

「1850年になってロンドンで再び経済学研究に取りかかることのできた」マルクスは、「全くはじめからやり直して、新しい材料を批判的に研究しつくそうと決意する」⁷³。

この亡命地ロンドンでの1850年におけるマルクスによる経済学研究の再出発の経緯については、既述の通り、前掲拙著において詳論したところである⁷⁴。また、その研究成果は、すでに前節第2項においても見た、リカード(差額)地代論の克服などにすぐにも現われるわけであるが、それ以降も書き継がれる膨大な24冊にのぼる「ロンドン抜粋ノート」⁷⁵に結実してゆく。この抜粋ノート第八冊(1851年4月～5月半ば執筆)の中では、ステュアートらと共に⁷⁶、リカードに対する何回目かの対決の跡を示す『経済学および課税の原理』からの抜粋が試みられている。以下、本節ではこれを「リカード抜粋」と称し、その中の比較的長い二つの評注を検討することにした。

1. 「リカード抜粋」の構成とその作成意図

(1) 「リカード抜粋」の構成

「リカード抜粋」の概要は(表3)のようである(付表の左側の数字は、マルクス自身の「ノートⅧ」の頁数)。

(表3) 「リカード抜粋」の概要

Aus Exzerptheft VIII: Ricardo (David), *On the Principles of Political Economy and Taxation*, 3 ed. London 1821.

S.19 I.) *On Value*.

20

21

22 (Steuart. Continuatio.)

⁷³ Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Erstes Heft, MEGA² II/2, S. 102.

⁷⁴ 前掲、拙著『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』参照。

⁷⁵ これらのノートの詳細については、MEGA²当該巻と共に、八柳良次郎「マルクス「ロンドン抜粋ノート」の意義——『資本論』成立史研究の新たな課題——」『社会科学の方法』第14巻第8号、御茶の水書房1981年8月および八柳良次郎「マルクス「ロンドン抜粋ノート」における貨幣・信用論」東北大学『研究年報「経済学」』第44巻第1号、1982年6月を参照。

⁷⁶ 「リカード抜粋」はひと続きのものではなく、その間に、J.ステュアート『経済学原理』からの抜粋を伴っている[S. 791, S. 811, S. 823, S. 825, Fußnote; S. 312–S. 425 (S. 445)]。なお、「ノートⅧ」の作成時期については、前掲2) MEGA² IV/8, *Apparat*, S. 925による。なお、前掲1)は、抜粋ノート第八冊の使用時期を1851年4月および5月、「リカード抜粋」の執筆時期を「1851年4月にできあがっている」[S. 782]と見ていた。また、Rubel, Maximilien: *Les cahiers de lecture de Karl Marx I. 1840 – 1853*. In: *International Review of Social History*, vol. II – 1957, pp. 407/408をも参照。

23
24
25
26
27
28

29 Ricardo. (David, contin. Von p.21)

II.) On rent.

30 - Grundsteuer.
- Steuern auf Rohprodukt.

31

32 - Rent. (Gegen die Doctrine of A. Smith concerning the rent of land.)

33 - Rent. (Gegen Malthus's Opinions on Rent.)

34 - **Wirkung der Imports von Korn auf Grundrente und Profit des Pächters.**

- **Wirkung der freien Korneinfuhr auf Profite und Capital des Pächters.**

- **Der zweite Theil der Rente, der nicht aus der relativen**

35 **Fruchtbarkeit der Erde hervorgeht.**

III.) Vom natürlichen und vom Marktpreiß.

36 - Unterschied von Werth (**natürlichem Preiß**) und Reichthum.

37 - Von dem Einfluß von Nachfrage und Zufuhr auf Preise.

38 - **Die Produktionskosten, d.h. der real value bestimmt nicht die production, sondern der market price.**

- **Depreciierende Wirkung von Verbesserungen in Agricultur und Maschinerie.**

- **Kornpreiß regulirt nicht den Preiß der andren Waaren.**

39 - **Der auswärtige Handel und der Tauschwerth.**

40 - **Bestimmung des Tauschwerths in verschiedenen Ländern.**

41 (Sir J. Steuart contin.)

42

43 Ricardo, D.P.o.P.E. continuatio von p. 40.

- **Einfluß des Colonialhandels auf Preise.**

44 - **Wirkung von Nachfrage und Zufuhr auf den Tauschwerth.**

45 *IV.) Vom Arbeitslohn.*

- **Unterschied zwischen Arbeitslohn
und der auf die Production einer Waare verwandten Arbeit.**

46 - **Einfluß des Wachstum(s) des Kapitals auf den Marktpreiß
des Arbeitslohnes und den natürlichen.**

- **Variations im natural price der Arbeit.**

- **Arbeitslohn und Rente.**

47 - **Steigen des natural price of labour und der Geldpreiß der Waaren.**

- **Bevölkerung und Arbeitslohn.**

48 - **Einfluß des Preises des raw produce auf den Arbeitslohn.**

49 - **Einfluß der Maschinerie auf den Arbeitslohn.**

50 (Serra (Antonio) (Calabrese) Breve)

51

52 (S. James Steuart. (Contin. von p. 42))

53 **Ricardo (D.) (contin. von p. 49.)**

- Steuern auf Arbeitslohn.

- **Noch eine Bemerkung über das Verhältniß von Profit und Arbeitslohn.**

-
- 54 *Sir James Steuart. (contin. von t. II p. 166)*
55
-
- 56 *D. Ricardo (Schluß von p. 53)*
V.) Vom Profit.
- **Permanente Variations in der Rate des Profits.**
 Theilung des Preisses des Products zwischen Capitalists und labourers.
- 57
- *Verhältniß von Profit und Arbeitslohn.*
- 58
59 - *Accumulation des Capitals.*
- *Einfluß von trade auf profits.*
- *Einfluß des foreign trade.*
- *Einfluß des home trade.*
- 60 - **Revulsion in trade.**
- *Effects der Accumulation auf Profits and Interest.*
- 61 - *Vom Roh und Reinertrag.*
- 62 - *Steuern auf Profits.*
- *Maschinerie und Steuern. Einfluß auf Profits.*
- *Steuern auf andre Waaren als Rohprodukt.*
- 63
64 - *Steuern gezahlt von dem Producer. (p. 457 – 59)*
- *Steuern auf Häuser.*
- VI.) Von den Steuern.*
- **Steuern fallen auf Capital oder Revenue.**
- 65 - **Vermehrter Preiß der Waaren durch Steuern und Geld.**
VII.) Aus der Vorrede. (Beginn des Buchs)

この抜粋は、あるいは、その執筆直前、1851年3月末～4月初めに作成されたとされる、「[リカード著『経済学および課税の原理』第3版、ロンドン1821年へのマルクスによる事項索引]」を基礎に、抜粋が進められているのかもしれない。

この「[事項索引]」では、「リカード抜粋」の「I. 価値について」と「II. 地代について」に相当する部分の多くを欠いている。が、労賃に関する項目をまず取り上げて、その後、利潤と労賃について、と見てゆく流れは、賃労働と資本との関係をいかに把握するかを問題意識として持ちつつ、これを労賃を中心にして捉えてゆくこととするものであろう。このように推測すれば、続く項目、外国貿易、国内商業、租税などは、賃労働と資本という本質的な関係を攪乱する諸要因、と位置付けられての記入と見得るのではなかろうか。引き続き、市場価格と真実価格は、価格次元と価値次元との区分への志向であり、以下の粗収入と純収入、農業と製造業の諸改良が現存の資本の一部に及ぼす価値低減作用 (Deprezierende Wirkung)、地代の第二部分、資本、外国貿易、などでの参照箇所は、生産の容易さ・生産力水準の問題についての言及であると思われる。

(2) 「リカード抜粋」の作成意図

「リカード抜粋」そのものも、その狙いとするとところは、やはり、賃労働と資本との関係、とり

わけその両者間の交換にあったと言える。この時点ではじめて、賃労働と資本との交換が、正面きって問題とされるに至ると言えよう。ツィンメルマンは、次のように述べる。即ち、

「抜粋された文言の配列が示していることは、資本と労働との間の交換が、マルクスにとっては、まだ解決されていない問題であったが、同時に、マルクスは、リカードの解決法の欠陥に気付いていた、ということである。この問題は、リカード派のJ. S. ミルやTh. ド・クウィンシー、また、リカードの論敵であるTh. R. マルサスについての研究の結果、なお一層鋭く設定されなければならなかった」⁷⁷。

リカードの方法の基底にベンサム流のブルジョア・イデオロギーを見出さんとしているツィンメルマンは、抜粋の配列からどのようにして上の事実が言い得るのかの論証に欠ける⁷⁸が、われわれの考慮は次のようである。

つまり、この抜粋の編成は、1851年4月当時のマルクスが構想していた自身の経済学批判の体系構成に合わせて、その各論理段階を、マルクス自らの言葉によってではなく、その最大の批判対象であるリカードの著書の諸文言をもって表現してみる、そして、看過できぬ決定的な誤謬箇所に対しては、評注をもって批判を行い、また留保を示す——このような作業から、この抜粋が作成されたであろうことを物語っているのではないか。こうした推測である。したがって、I. 価値について、II. 地代について、III. 自然価格および市場価格について、IV. 労賃について、V. 利潤について、VI. 租税について、VII. 序言（同書の冒頭から）——という編成は、その含意を汲めば、次のようなものと見得るのではなからうか。即ち、I. 価値論、II. 価値論の補完としての地代論、III. 地代論などから生じざるを得ない価格次元の攪乱諸要因を価値次元から弁別して、さらに価値論の補完とする、IV. 可変資本部分の考察、V. 剰余価値部分の考察、VI. これまでの生産領域につい

⁷⁷ Zimmermann, M.: Marx' Ricardo-Rezeption im Heft VIII der Londoner Exzerpthefte (1850–1853). In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 8, Halle (Saale) 1979, S. 19.

⁷⁸ あるいは、当時ルター大学の同僚であったW. ヤーン / D. ノスケの次のような把握を共に前提としているのかもしれない。

1850年代当初は、素材をわがものとするための分析に取り組んでおり、個別的テーマについての研究であるが、51年のノートⅧに入ると、それらの諸研究を、この時点なりの水準で総合するプロセスへと移行する [Jahn / Noske, *ibid.*, S. 55/56] と言うのである。その際、「ブルジョア古典経済学の首尾一貫した叙述を、マルクスは、リカードの『経済学および課税の原理』に見出す」[*ibid.*, S. 56] と同時に、「リカード学派の二帰着点」として「1. 価値の法則に一致する、資本と労働との間の交換。2. 一般的利潤率の形成。剰余価値と利潤との同一視。価値と費用価格との関係の無理解」[Karl Marx Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861–1863). In: MEGA² II/3. 4, Berlin 1979, S.1370] を指摘するような後のマルクス程の認識水準ではないが、「しかしながら、本来、マルクスは、リカード理論のこのアンチノミーに、例えばスミスについてのウェークフィールドによる評注において気付かされていた」[Jahn / Noske, *ibid.*, S. 57]。このため「リカード抜粋に対するマルクスの評注では、マルクスが、この論理的矛盾の解決を求めて努力しており、その際、なお決定的な躍進を欠いてはいるものの、注目に値する認識上の進歩を遂げている。なお克服されていない障害は、当時、マルクスにとって、リカードの著書の誤まてる体系であった」[*ibid.*] と見ている。さらに、「マルクスは、この論理的矛盾を、1851年には、さしあたりなおリカード体系のこの誤まてる構造の内部で解決しようと試みた」[*ibid.*, S. 58] としている。

しかしながら、本文において続いて示すところであるが、「リカード抜粋」の構成自体に、リカード『原理』の構造を越えて出ている当初からの意図が見出せるのではなからうか。

での考察から、ここで初めて、分配領域の考察へ、Ⅶ. リカードの分配論基軸の論理を逆転させて、生産領域から分配領域へ、という展開にしようとするマルクスの意図を最も象徴的に示している、『原理』序言の最末尾への移し替え、——である。

以上は、まさに推測の域を出ぬものではあるが、また別の推測が既に公にされている⁷⁹こともあり、あえて記してみた次第である。

2. リカード資本増加論の批判と資本価値増大の問題設定

「リカード抜粋」のおおよその構成とその抜粋意図を押さえた上で、その中に記されているマルクスの評注のうち、比較的長いもののうちの一つ、「Ⅲ. 自然価格および市場価格について」の項で、その基本点が展開されたのちの最初の小項目「価値（自然価格）と富の区別」に付されたものを、まず本項では、検討することにしよう。

(1) 価値次元と価格次元の弁別とその関連

「Ⅲ. 自然価格および市場価格」の項目では、文字通り『原理』第4章「自然価格および市場価格について」からその基本的諸点の抜粋が、以下のように行われる。

まず、自然価格、市場価格それぞれの規定について。次に、市場価格の変動が各産業への資本の配分、利潤の均等化をもたらすこと、その資本移動の具体的な有り様。そこから、いわば平均利潤形成の可能な諸商品の交換価値の調整者としての競争の役割についての叙述。またこの顕著な例として挙げられている「流行の変化」による商品の需要の増・減がそれら商品の生産に必要な相対的労働時間を変化させないにも拘らず、商品の市場価格を上昇・下落させ、利潤・賃金も各々の部門で別様に上・下する、との説明。で、ここからリカードは、偶然的諸原因を捨象するのだが、その言は、ここでも引用しておこう。

「これらの偶然的諸原因を認めたくえて、われわれは、これらとは独立の諸結果であるところの自然価格や自然賃金、自然利潤を規制する諸法則を取り扱うのであるから、その間は、さしあたり、そうした偶然的諸原因を全く度外視しておく」[S.802/803; S.362]⁸⁰。

⁷⁹ 内田弘の次のような見解である。即ち、

「『要綱』執筆のころから明示される6編プランの萌芽が潜在していよう。すなわち、「Ⅰ 価値論」および「Ⅲ 自然価格・市場価格論」は「Ⅴ 利潤論」とともに6編プランの「第1編 資本」に属し、さらに「Ⅵ 地代」=「第2編 土地所有」、「Ⅳ 労賃」=「第3編 賃労働」、「Ⅵ 租税」=「第4編 国家」とほぼ等置できるとすれば、『原理』のかかる読み破りに6編プランのうちの前半体系の基礎が存在しているといえよう」[内田弘「第1部 マルクス経済学の生成・第2章」『講座 経済学史Ⅲ マルクス経済学の生成と確立』同文館1979年7月、60頁]。

このような見解は、まず、筆者には決定的と思われる、「Ⅶ. 序言（同書の冒頭から）」を無視している点において疑問なしとしない（ちなみに、内田は「抜粋」の紹介の際、Ⅰ～Ⅵまでを挙げて、「以上七つのテーマ」としているが、これは「六つ」の誤植か、「Ⅶ. 序言」の脱落かのいずれかであろう）。さらに、Ⅰ～Ⅶ〔内田はⅥまでだが〕の順序にこそ意味があると思われるのに、それを無視し、あえて「6編プラン」に合わせようとしている。以上、2点において、推測としても蓋然性が低いように思われる。

⁸⁰ リカードからの引用は、Ricardo, *ibid.*, pp. 91/92.

これに対して、マルクスはこう批判する。即ち、

「リカードは、彼が偶然的と考えたものは捨象する。現実的過程を叙述することは、また別のことである。その現実的過程においては、両者——彼が偶然的運動と称するもの、が、しかし、持続的かつ現実的なもの、これと、彼の法則、即ち平均的關係と、——この両者が、等しく本質的に現われる」[S.803; S.362]。

このような評価は、『経済学・哲学手稿』に端を発し、そこでは「国民経済学者」全般に対してのものであったのが、パリ時代の「経済学ノート」（とりわけ「リカード・ノート」および「ミル・ノート」）⁸¹や、既に見た『哲学の貧困』でのリカードに対するローダーデールの対置などを経て、特にリカードについてのものに特殊化されてくる。ヘーゲルの法則把握（有→本質→概念の三層構成⁸²）を下敷きにしながら、「経済学における啓蒙の立場」⁸³にとどまるリカードの法則把握に対する批判である。その批判が、ここではより一層具体的な批判となっている。文脈を勘案するならば、リカードは本質を把握するとして、自然価格次元のみを押さえ、市場価格次元は捨象してしまうが、現実においては、両者とも「本質的に、現れる」ことを指摘しているものである。マルクスにとってみれば、論理においては、自然価格（すぐ次の項目では、これを価値とみなしているが）という本質的なものから、市場価格の運動という概念的なものを、発生論的に説明しなければならないのであった⁸⁴。したがって、この評注は短いながらも、この「Ⅲ. 自然価格および市場価格について」の抜粋の作成目的が、価値次元と価格次元との区別の明確化と、その両者の関連の正確な把握にあることを、早くも冒頭において明らかにしているのである⁸⁵。

（2）商品に現れる限りでの労働の二重性把握の萌芽とその成果

それに引き続いて、問題の「価値（自然価格）と富の区別」という項目が立てられる。ここでの抜粋の対象は、『原理』第20章「価値と富、それらの特性」である。この項目では、長短四つの評注が記されており、それに則って、四つの部分に分け得るので、順次、見てゆくことにしたい。

⁸¹ Vgl. Exzerpte aus Xenophon von Athen: Werke, David Ricardo: Des principes de l'économie politique et de l'impôt, und James Mill: Éléments d'économie politique, MEGA² IV/2, S. 392, S. 447.

⁸² Vgl. Hegel, G. W. F.: Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse (1830). Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik. Mit den mündlichen Zusätzen, G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Bd. 8, Frankfurt/M 1970.

⁸³ 前掲、拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論」150/151頁、175/176頁を参照。

⁸⁴ 前掲、拙稿「経済学批判の端緒的形成」103頁および前注の拙稿159頁参照。

⁸⁵ W. ヤーン / D. ノスケは、これを「経済法則とその競争による貫徹形態との間の関係の解明」[Jahn / Noske, *ibid.*, S. 62] と称し、「ミル評註」、『貧困』、「リカード抜粋」、『要綱』各々の関連箇所を対比している。「リカード評註」について関説しているところでは、本稿の本文において見たマルクスによるリカード批判を引用し、二つの次元の区分が為されたことを見るが、「マルクスは、リカードの叙述様式の構造を、この時点ではなお首尾一貫しては爆破しえていない」[*ibid.*, S. 64]、また「当初は、リカードの叙述の構造によって欺かれてはいたけれども、それにも拘らず、それらをマルクスは1851年に、同じ抽象段階の二つの区別される水準として顧慮した」[*ibid.*] というように、先の脚注78でも述べた通り、本稿とは異なって、むしろ「リカード抜粋」の未熟さを強調する見解を採っている。

まず、最初の部分では、リカードによる価値と富との区別、その根拠の文言が引かれる。

「〔価値は、生産の難易に依存する。諸製造業では、100万の人間の労働は、常に同一の価値を生産するが、しかし同一の富を生産するとは限らないであろう〕」[S.803; S.363]⁸⁶。

こうであるとする、当然誰も生じてくる疑問、それをマルクスはまず記す。

「そうだとすれば、しかし、価値は、どのようにして増大するのか？」[ibid.; ibid.]

リカードのような把握では価値の増大の正しい把握が不可能であることを指摘してゆく第一段である。いわば、価値論の領域でのリカードの誤り、使用価値と（交換）価値との正当な区別とその矛盾の把握が欠落していることへの批判である。これに続けて、マルクスは、リカードの説明から考える限りでの価値増大の可能性と根拠とを枚挙してゆく。結局のところ、それは、「人口の増加。それを使用する資本の増加。作業諸部門の多様化」[ibid.; ibid.]なのである。

次の第二の部分では、『原理』第20章からの四つの抜粋と二つの内容要約が、まず記される。その内容は、次のようなものである。

即ち、貧富の基準は、支配できる必需品・奢侈品の多少にあるのに、価値と富との混同のために、商品の量の減少によって富が増加するというような謬論がなされている。こうした富の増加は、結局他人の富の分け前を減少させているだけなので、真の増加とは言えない。また新発明による富の増大もあるが、それは価値を増加させるということはない、——というリカードの文言であり、そこで、次に、本稿の序の第2項で記しておいた二つの引用のうちの前半、①“国富増加の二方法”が抜粋される。さらに、その二方法のうち的一方、生産力増大による方法の例として、10人の粉挽臼を動かす労働、風車や水車による節約を通じての価値下落と国富の増加例が抜粋される。そして、最後に、セーによるスミスの自然力の評価把握批判に対するリカードの擁護の箇所が引用されている。

以上の抜粋に対してマルクスは、まず、「価値と富との単なる概念の区別で、リカードは困難を止揚しているわけではない」[S.804; S.364]と述べる。

しかし、このマルクスの一句についてまずもって問われなければならないはずの「困難」とは、何の「困難」なのか、ということが、従来の研究では全く明らかにされていない。ただこの句が引用されるのみである。たいていの場合は、価値と富との正しい区別、さらに両者の矛盾把握をしないところから生ずるであろう様々な諸問題のこと（だが、それが何かは、具体的に明らかにされてさえない）か、あるいは、第一の部分にも存し、また、ここでの評注に続く部分で示される「価値はどのようにして増大するのか？」が解決し得ない困難である、とみなされているようである⁸⁷。しかしながら、この「困難」とは、抜粋との関連を考慮すれば、直接的にはまずなによりも、直前

⁸⁶ リカードからの引用は、Ricardo, ibid., p. 273.

⁸⁷ Tuchscheerer, W.: Bevor „Das Kapital“ entstand – Die Herausbildung und Entwicklung der ökonomischen Theorie von Karl Marx in der Zeit von 1843 bis 1858, Berlin 1968, S. 323/324; Jahn, W. / Noske, D.: Fragen der Entwicklung der Forschungsmethode von Karl Marx in den Londoner Exzerptheften von 1850 –1853. In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 7, Halle (Saale) 1979, S. 60.

に引用されている、セーのスミス批判に対してのリカードの反批判が、完全には成功していない、ということマルクスが述べているものと判断するのが妥当である。スミスのように投下労働価値論に立つ際（但し、あくまでも「初期状態」で）、当然予想されるようなセーからの自然や機械による価値付加の看過という非難、それが提起するスミスの把握に伴うそれらの労役と人間の労働とが区別し得なくなる困難、これらを、リカードが、後のマルクスのように労働の二重性把握および労働過程と価値増殖過程との区別を行うことによって、止揚し、セーを根本的に論破し得ていない、という意を込めての評注なのである。確かに、『資本論』でのような明確な基準（労働の二重性・価値増殖過程把握）に基づいてのものではないが、そうした方向性をもった批判なのである。それ故、先の第一の評注部分は、リカードによる使用価値と価値との不十分な区別に対する、価値論次元での批判であったのに対して、この第二の評注部分は、リカードによる使用価値と価値との不十分な区別に対する、労働あるいは生産を基準としての批判なのである。いわば、剰余価値論の領域からするものと言ってよいかもしれない。

こうした本稿の主張に対して傍証を与えるかに思われるのは、後の『資本論』における次のような言明である。

「[……] リカード自身は、〔商品に〕二重に表されている労働の二重性格をほとんど区別していないので、そのために、「価値と富、それらの特性」という章〔第20章〕の全体にわたって、J. B. セーなどの愚論と争うのに苦労しなければならないことになる」⁸⁸。

前半で、理由として挙げられているリカードにおける労働の二重性把握の欠落を「ほとんど区別していない」と定式化できるのか否かその程度についてはさておき、後半でのリカードの対セー論争での四苦八苦についての注目は、ここ「リカード抜粋」にも通じるマルクスのリカード『原理』第20章評価の基礎となる受け取り方だったと言い得るであろう。また、価値増殖過程を直接の対象にしては、機械の作用と価値移転についての次のような文言が『資本論』に見出される。

「[……] リカードもその前後のどの経済学者も労働の二つの面を正確に区別しておらず、したがって価値形成でのこの二つの面が演ずる役割の相違などはなおさら分析していない[……]」⁸⁹。

詳論は避けて、『資本論』から今一つの引用を記すに留めよう。

「古典経済学は、労働過程と価値増殖過程との分析が不十分であったために、再生産のこの重要な契機〔労働は、その生産手段の効果や規模や価値の増大につれて、したがって労働の生産力の発展に伴う蓄積につれて、絶えず膨張する資本価値を常に新たな形態で維持し不滅にする〕を十分に把握したことはなかったのであって、それは、たとえばリカードにも見られるところである。彼はたとえば次のように言っている。生産力がどんなに変動しようとも、「100万人という人間は工場ではいつでも同じ価値を生産する。」彼らの労働の長さや強度とが与えら

⁸⁸ Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 94, Note 31.

⁸⁹ Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 219, Note 21. この注21に続く、注22におけるセーに対する批判〔Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 220, Note 22〕をも参照されたい。

れている場合には、これは正しい。しかし、このことは、彼らの労働の生産力が違えば、100万人という人間が非常に違った量の生産手段を生産物に変え、したがって非常に様々な価値量を彼らの生産物のうちに保存し、したがって彼らが供給する生産物価値は非常に違ってくるということを妨げるものではなく、この点はリカードもいくつかの推論のなかで見落としているのである。ついでに言えば、リカードは、前記の例によってJ. B. セーに向かって使用価値（これをかれはここでは wealth [富] と呼んでいるが、それはつまり素材の富のことである）と交換価値との区別を明らかにするという無駄な試みをやっている⁹⁰。

「リカード抜粋」に戻って、次に続けて記されるマルクスの評注を見てゆこう。

マルクスは「ブルジョアの富および全ブルジョア的生産の場合の目的は、交換価値であって、享楽ではない」[S.804; S.364]と記した後、前節でみた「賃労働と資本」第5回掲載分で展開されている生産的資本の増加と同じ内容と言ってもよい、特別利潤を求めての生産力の上昇と、その当面の独占、その喪失後の生産物の価値低下という展開を、ブルジョア的生産の無政府性との関連の中で述べている。この価値と富との区別というような文脈からのこうした内容への展開は、ツインメルマンによれば、既に「ブリュッセル・ノート」に見出され、その発展と考えられるとのことであり、「[……]ブリュッセルで書かれたシスモンディ『経済学研究』の抜粋への注記に続く形で、価値と使用価値との間の矛盾についてのその考えを、さらに展開している⁹¹と捉えている。

このマルクスの展開に今少し立ち入ってみよう。全ブルジョア的生産の目的は、交換価値にあるのであるから、次のような帰結となる。

「この交換価値を増加するためには——相互のたまし合いを別とすれば——生産物を倍増すること、より多くを生産すること以外に手段はない。この生産物増加を達成するためには、生産力を増加しなければならない。しかし、一定の労働量の——資本と労働の一定額の——生産力が増加するのと同一の割合で、生産物の交換価値は低落し、倍加された生産物は、以前の半分と同じ価値をもつ。[……]今、上記のことが均等に生じるとすれば、価値はなんら変化せず、したがってブルジョア的生産の全刺激はなくなるであろう」[S.804; S.364]。

ところが、ブルジョア的生産においては、そうした生産力上昇は、均等ではなく、「不均等に生じる」。これによって、ブルジョア的生産には「一切の衝突が現われるようになるが、しかしそれと同時に、ブルジョアの発展が現われる」。こうしたブルジョア的生産と不可分の矛盾した性格を、マルクスはさらに続けて記してゆく。即ち、

「商品の増加生産は、決してブルジョア的生産の目的ではなくて、価値の増加生産がブルジョア的生産の目的である。生産力の現実的増加と商品の現実的増加は、それにも拘らず生じ、そしてこの価値の増加——それは生産の増加へ向かってのそれ自身の運動となって自らを止揚する——との間の矛盾が、一切の恐慌等の根拠となっている。ブルジョアの産業が絶えず回転し

⁹⁰ Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 633/634, Note 60.

⁹¹ Zimmermann, *ibid.*, S. 25.

ているその中軸をなす矛盾」[ibid.; ibid.]。

ここでの展開は、先にも述べたように「賃労働と資本」のそれとほぼ同一と言ってよいが、次のような相違＝発展が見出される。

まず、ブルジョア社会の特殊歴史的な性格が、「価値の増加生産」として明瞭に把握されており、後の資本の本性把握に連なるものと見ることができる。そして、この価値の増加と商品量の増加との間には恐慌にまで至り着く矛盾が孕まれていることも指摘される。これらは全て、生産力の増大が価値と使用価値とに与える異なった影響を軸とする把握になっている。「賃労働と資本」では、生産的資本の増大に付随しての生産力増大、という位置付けであったのに対して、ここでは、より抽象的に、生産力の増大そのものとして捉えられるに至っている。

(3) リカードの“資本・追加資本”規定批判と蓄積論等「経済学批判」体系形成の萌芽

さて、続く評注の第三の部分では、「リカードは資本について言う」[ibid.; ibid.]と記した後、本稿の分析視角を導出する際に見たリカード『原理』からの二つの抜粋のうち、②“資本・追加資本”の規定を、そのまま抜粋している。

それに対して、マルクスは、「第一に。」として、リカードからの抜粋の後半部分の批判を行う。そこでのリカードの主張は次のようなものである。即ち、富は生産された諸商品の量に依存する。というのは、一定量の衣服や食物は、同一数の人を扶養・使用し、同一量の仕事を仕上げさせるからである。したがって、その一定量の衣服や食物が、200人の労働によって生産されるときには、100人の労働によって生産されるときに2倍の価値をもつわけだが、そうした価値には、富は関係しない、という主張である。

これに対するマルクスの批判は、結論から言えば、社会的必要労働量による価値規定の対置であって、おおよそ、次のようである。即ち、同一人数を扶養・雇用するところの、同一量の衣服・食物といえども、それが100人の生産物であるか、200人のであるかは、その時々を生産力水準によって決まっているはずである。したがって、その時点での社会的必要労働量が100人とみなされる生産物であるのに、あえて200人を投じて創り出した生産物であるからといって、100人を投じたものと比べて、2倍の価値を有している、などと言うことはできないであろう——との趣旨である。続けて、「第二に。」として記されてゆく部分 [S.805; S.365] を見よう。

まず、リカードの素材的な資本規定が批判される。即ち、

「リカードは、ここで、資本を、資本の材料 (Material) と混同している。富は、資本の材料 (Materie) にすぎない。資本は常に、再び生産に予定されている価値の額であって、この価値額は単に生産物の額ではなく、また生産にだけ予定されているのではなく、価値の生産に予定されているのである」[ibid.; ibid.]。

このような素材的な面でだけの資本の規定に対する批判は、既に「賃労働と資本」[MEGA¹ I/6, S.483/484] に存在していた (本稿43頁参照)。が、そこではリカードと直接名指しではなく、「経済学者たち」[ibid.] となっていたのに対して、この「リカード評注」を経て、後の『経済学批判

要綱』の各所 [MEGA² II/1. 1, S.179 u. S.228] では、リカードの名が明示されている。

次に、リカードの追加資本についての規定が批判的に考察されてゆく。即ち、

「もし追加的商品が機械等によって創り出され、このことによって、追加的労働者が動員されうるとしても、なんら追加的資本は創り出されてはおらず、古い資本の生産力が増加せしめられたのである。どんな資本家でも、彼が同一の100ターレルでより多くの労働者を動員することができる場合、追加的資本を所持しているとは言わないであろう」 [S.805; S.365]。

つまり、「彼の資本は、この場合、増加しているのである」 [ibid.; ibid.]。では、何故、増加しているといえるのか。マルクスはノートの頁を改めてその理由を示す。

「というのは、利潤の率が労賃以上に騰貴し、そうして、古い資本のうちより多くのものが、労働者たちの支出という形態においてではなく、資本の形態において再生産されるためである (weil die Rate des Profits über den Arbeitslohn steigt und so mehr von dem alten Capital in der Form von Capital statt in der Form von expenditure der Arbeiter reproducirt wird.)」 [ibid.; ibid.]。

リカードが、技術と機械の改良から得られる、即ち、生産力の増大によって得られる追加的商品を通じての、追加労働者雇用という事態までも、追加資本とみなしているのに対して、これは追加資本というのではなく、以前の同一価値額の資本が増加していると把握すべきである、とマルクスは言うのである。つまり、マルクスは、以前の資本そのものの増加と見るわけである。そのマルクスの根拠付けについては、本稿はその含意を十全に捉えきれていないものの、生産力の増大に伴って“可変資本”部分の価値が低下し、その自由になった部分を「資本の形態」で再生産するという、“賃金基金”の変動（価値の低下）に基づく蓄積の問題へ道を開く萌芽を示しているように思われる。また、先に本項の63/64頁で『資本論』から引用しておいた部分と同じ内容〔生産力の増大に伴う、同一労働量による、いっそう多くの不変価値の生産物への移転〕をも含むかに思われる。さらに、引き続き評注部分での、自由になった資本での追加労働充用という内容をも勘案すると、ここでは、使用価値と交換価値とのリカードの不十分な区別に対する蓄積論の次元での批判がなされているように思われる。

このように資本の再生産ないしは蓄積という面をも含めて考察しておかなければ、資本の増加は正しく把握 (begreifen) し得ないのであって、それを追加資本と見てしまうリカードが批判されるわけである。曰く、「そうでなければ、なるほど、富の増加を把握することはあっても、資本の増加を把握することはないであろう」 [S.805; S.365]。

だが、こうした事態は持続するものではない。即ち、

「この利点は、ただ同じ程に生産的な諸資本の競争が、彼らの剰余利得を均等化してしまうまで持続するだけである。[……] この均等化の後には、なるほど増加された使用価値は残るが、価値は同一の割合で増加し続けはしない」 [ibid.; ibid.]。

つまり、資本がより生産的になったとしても、それが社会内に一様に拡張し、均等的であったならば、より大きな富が形成されるにしても、ただそれだけで価値は増加しないのである。したがって、リカードの言うような追加資本による価値の増大の根拠付けは誤りというほかないということ

になる。その内実には次のような過程があるからである。即ち、

「資本の生産力の増加が、常に一面的であり、それ故に、さしあたりは、価値の増加でもあることによって、[……] さらに、資本家が同一の資本でより多くの労働者を動員することによって、資本家は、それ故に、労働の量を増加し、例えば以前の百万人の代わりに二百万人を労働させ、そうして価値をも増加する」[ibid.; ibid.]。

ここまでくれば、もはや明らかなように、価値の増加は、結局は、投下労働量の増大によってしか達成され得ないのであって、機械などによる生産力の増大も同様に、上の引用のような媒介を経て、投下労働量の増大に至り着くことが示される。つまり、価格次元での諸資本の競争や蓄積の諸要素よりも、生産過程での投下労働の増大こそが、価値の増大にとって本質的である、との主張である。

付随的な事柄ではあるが、ここで注意しておきたい点を二つほど、述べておきたい。

一つは、「資本家は、労働の量を増加し」という上の引用中にも窺われるように、資本の本質的な規定の一つとして、「賃労働と資本」同様、労働者に対する支配という観点がここにも貫かれていることである。

今一つは、上掲引用の省略箇所 [……] で、本稿第Ⅱ節において見た、差額地代との類比が行われている点であり、これはすぐ後にも触れるが（本稿68頁）、特別利潤による価値の増加を媒介とする論理であることに注意したい。「賃労働と資本」での展開同様、後の『資本論』で言うところの特別剰余価値の問題である。

ここ「リカード抜粋」においては、差額地代と類比しており、また「地代の場合と同様に価値創造」と表現しているところから、「さしあたりの価値の増加」は、実体的な増大と受け取らないのが妥当であろう。が、それが、蓄積・再生産を介在させ、追加労働を支配すると、実体的にも価値の増大を惹き起こしてゆくという把握になっているように思われる。しかしながら、このような把握も、後の時点のマルクスにとって、きわめて不十分なものと考えられるに至り、ことに『経済学批判要綱』において、「生産力が倍加したとするならば……」という再三再四の計算例にマルクスが取り組むのもこの故ではなからうか。

このような価値増加という事態を多面的・重層的に把握しなければならないという困難と伴に、マルクスにとって混乱を生じさせたもう一つの原因は、すぐ次にやはりマルクスが評注を記しているところの、『哲学の貧困』以来の発想、「交換可能性と等価物の創出」[S.805/806; S.366]、「商品の価値付与性 (Verwerthbarkeit)」[S.810; S.371]の問題である。マルクスにあっては、リカードのように競争論の次元、乃至は、市場価格の次元を「単純に均等化」してしまうのではなくて、常に現実の経済上の運動に目を配りながら、その本質を残しているところの自然価格（価値）の次元に分析を深めてゆくのであり、さらに、本質的な価値の次元から、どのようにして市場価格の次元が規制されているのか、また、価値法則が貫徹してゆくのか、これらをマルクスは常に顧慮しているのである。現実にも目を向けながらの下降的分析と、いったん確保した本質次元から現実への上向的發展・総合への持続的留意と言えよう。そしてこの上向の道を、マルクスは、一つの闘争（競争）

とのみ、ここでは見ているが、後のマルクスではそれが次第により一層整備された媒介となってゆくのである。

このようにして、投下労働価値論を貫徹してゆき、価値の増加・資本の増加を説明しようとするれば、当然、では、どのようにして投下労働量の増加が、生産力増大によって、もたらされるのか、という形で問題を立てざるを得なくなる。このような正しい問題設定を行っていないが故に、リカードは批判されるのであって、マルクスは、ここでは、リカードの理論に内在しつつ、リカードに代わって正しい問題設定にまで導いてきたのである。

付随的論点を終えて、評注に立ち返れば、そこでは次のように続けられている。

「リカードでは、地代の場合のように、一方から取り上げられたものを、他方が取得するということでなしに、どのようにして価値が、したがってまた資本が、増大されうるのかということが、一般に少しも明らかではない」[S.805; S.365]。

マルクスは、これに対してのリカードの解答と見得る可能性のあるものを枚挙する。即ち、「人口の増加、資本の生産力の増加、即ち、労働者の相対的賃金の減少、既に為された労働の節約、これら以外で、それに数えられるものには、とりわけ事業方法の比例的な多様化がある」[ibid.; ibid.]、と。

このようなリカードの解答に対置されるマルクスのそれは、次の二要件である。

「より多くの価値が創り出されるのは、1) より多くの人手が仕事に就く、即ち、一部門で仕事に就くこと、そして、2) それと交換される他部門で、それに相応する労働が呼び起されることによって、である」[ibid.; S.365/366]。

まず、投下労働量の増大が押さえられる。次に、これが、実際の社会的必要労働量になり得るか否かが判定されるどころの、労働が固着した商品の販売の実現要件が、やはり、労働に即して押さえられている。

ここで注意したいのは、リカードの言う「人口の増加」と、マルクスの言う「より多くの人手が[……]仕事に就くこと」との相違についてである。一見同一のようにも思えるが、実はここには、労働日についての両者の把握の決定的な相違が横たわっている。つまり、リカードにあっては、労働日の長さや労働の強度は常に一定であることが当然自明のものとして前提されて議論が運ばれている、否、彼にとっては、そうしたものの変動など考慮の内にも入ってきていないのである⁹²。対

⁹² この労働日と労働強度にも関わる研究潮流に若干触れておきたい。

W. トーフシェラーの前掲書は、『資本論』形成史——とりわけ価値論に即しての——についての貴重な成果を含んでいた(前掲、大石高久「成立史に見る価値概念と疎外論」参照)。しかしながら、前掲、八柳良次郎「マルクス「ロンドン抜粋ノート」の意義」が紹介しているように、M. ツィンマーマンによる批判がある。

「[リカード抜粋]におけるマルクスの価値論の評価について、W. トーフシェラーは、「興味ぶかいことには、リカードゥが彼の価値論の根本命題を叙述した『経済学および課税の原理』第1章全体にたいして、マルクスは、二、三の比較的短かな論評——そのいずれもがリカードゥの論述に対立するものではない——しか加えていない。このことは、価値規定の一般的な根本命題にかんしてリカードゥに合意している印と見なすことができる」[Tuchscheerer, ibid., S. 321]と述べている。これに反して、M. ツィンマー

して、マルクスにあっては、それらは常に変動するものであって、それ故に、議論の際には、それらの一定乃至は変動がいちいち前提されていなければならないのである⁹³。この点についての一層鋭い把握こそが、剰余価値論への道を拓くのであって、本稿でも次項において見る、「リカード評

マンは「論評なしに与えられたリカード価値論の基本命題の配列の背後に、価値についてのそれ〔リカードの〕とは異なった別の解釈が隠されている」[Zimmermann, *ibid.*, S. 23] とトゥーフシェラーを批判している」[上掲, 八柳論文, 4/5頁]。

このような批判の端緒は、W. ヤーン/R. ニーツォルト (Jahn, W./Nietzold, R.: Probleme der Entwicklung der Marxschen politischen Ökonomie im Zeitraum von 1850 bis 1863. In: Marx-Engels-Jahrbuch, Nr. 1, Berlin 1978, S. 145-174) に求められよう。そこでは、価値の量的な側面についてはトゥーフシェラーに同意しつつも、リカードでは、価値を形成する労働という質的な側面や価値形態の特殊性についての問いが立てられていないことに注意しなければならないとして、マルクスの一つ一つの評注をそうした面から見直すべきであるとす。例示されるのは、「I. 価値について」で『原理』第1章第2節からの「労働はもちろんその質を異にするものであって、相異なった事業部門での相異なった労働時間の比較は困難である。しかしこの階等には実際にはいち早く確定されている。[Ricardo, *ibid.*, p.20]」という抜粋に対する「(リ [カード] (R.) はこのことについては、これ以上の展開を行っていない。)」[S. 787; S. 327] という評注である。これについて、ヤーンとニーツォルトは、「明らかにマルクスはここで、価値を形成する労働の質の問題について考察し始めている」[S. 160] と評価している。

前掲のヤーン/ノスケ論文においては、一層明確に、この評注の箇所をもって、「1851年にすでに、労働の二重性の発見に道を拓くある萌芽が明白になっている」[Jahn/Noske, *ibid.*, S. 61] と判断している。そして、リカードの文脈からして最も素直な理解と思われる「複雑労働に対する単純労働の関係」[*ibid.*]については、それは既に『哲学の貧困』において明らかにされている、として捨てている。

こうしたトゥーフシェラー批判に対して、本稿では、次のような判断を対置したい。マルクスの評注は、労働の二重性の指摘というよりは、むしろ、労働日の長さと労働強度についてのものではないか、という判断である。その根拠は、同じ部分を『原理』から引いて、価値増殖の秘密を述べている後の『要綱』の次の箇所の存在である。

「資本が資本に実現された労働に比例して生きた労働と交換されないのは何故であろうか？ 生きた労働自体の量と、それが客体化された労働量とがイコールでないのはいったい何故であろうか？ 「労働はいうまでもなく質が異なっているので、様々の事業部門のいろいろな労働時間を比較することは困難である。しかしこの等級は、実践の上では極めてたやすく定められる。」(19, 13. — 「リカード抜粋」の頁数 [橋本]) 「短期間では、少なくとも一年ごとでは、等級の違いの変化は大したことはなく、したがって考慮されなくてよい。」(19, 15.) これはそうではないのである。もしもリカードが彼自身の原理を、即ち、種々異なった労働力能がそれに還元されうる (単純な) 労働諸量を適用していたならば、事態は簡単であったろう。一般に彼は労働時間を同じように扱っている。」[MEGA² II/1. 2, S. 456]

リカードは異なった質の労働に注目し、それを単純な労働に還元しはするものの、この還元 = 分析が不徹底であり、実際は平均的な労働を扱うのみである。マルクスは、分析を徹底し、労働日の長さや労働強度の相違を確保し、この点から単純労働を据えるのである。

それ故、先の「リカード抜粋」での評注も労働日と労働強度についてのものであって、その限りではトゥーフシェラーの量的把握が妥当なのである。ヤーンらの示す評注再評価の方向性は正しい [上掲, 八柳論文, 5頁] にしても、再評価の行き過ぎは厳に戒めねばなるまい。

⁹³ 『資本論』第5篇第15章「労働の価格と剰余価値との量的変動」第1節「労働日の長さや労働の強度とが不変で (所与で) 労働の生産力が可変である場合」の表題そのものを見よ。また、次の文言を。

「リカードは前記の三つの法則をはじめ厳密に定式化した。彼の説明の欠陥は、(1) かの諸法則が妥当する場合の特殊な諸条件を、資本主義的生産の自明的な、一般的な排他的な諸条件と見なしているということである。彼は労働日の長さの変動にも労働の強度の変動にも気がつかないので、彼の場合には労働の生産性が自ずから唯一の可変的要因になるのである。—— (2) [……]」[Das Kapital, MEW, Bd.23, S. 546 u. Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie¹, (Reprint), Tokyo 1959, S. 508. 初版では現行版と異なり、この段落は、三つの法則を紹介した直後に置かれている]。

注」の別の箇所を萌芽として、「ロンドン抜粋ノートⅨ・Ⅺ・Ⅻ」各冊における「リカード左派」⁹⁴の抜粋を経て⁹⁵、『経済学批判要綱』に至って定式化されてゆくのである [MEGA² II/1. 1, S.248 u S. 264/265]。

価値増大の二要件に続いて、評注では続けて、第二点の例として、イギリスの木綿製造業を挙げた後、「この交換可能性と等価物の創出とを、リカードは全く無視している」[S.805/806; S.366]と述べる。先に(67頁)も少し触れておいたが、この点の把握こそ、マルクスによるブルジョア社会の特殊歴史性把握の軸芯であろう。またマルクスの終始一貫した把握でもある。これが初期においては比較的表面化し⁹⁶、後期においては潜航しているかに見えるのは、ブルジョア社会を理論の内どのように反映し、叙述するかという手法の彫琢による。歴史と論理との連関の問題とも言い得る。つまり、この時点では、まだ、完成したブルジョア社会を分析対象にするということが、十分明確に意識されていないのである。つまり、商品生産が全社会に満面開化した状態を前提しての

⁹⁴ Schrader, *ibid.*, S. 165.

⁹⁵ シュラーダーは、ノートⅨ・Ⅺ・Ⅻにおけるディルク、レイヴンストーン、ホジスキンの立論を「これはまさしくリカード評注の第二の付加部分 [本稿では次項において検討する評注一橋本] におけるマルクスの思考経過であって [……]」[Schrader, *ibid.*, S. 163] と述べているのみで、マルクスが「リカード抜粋」執筆前にこれらの著作を読了済みであるか否かには触れていないが、読了済みであると推測する。

⁹⁶ この表面化している側面のみを見て初期マルクスを特徴付けてはならない。トゥーフシェラーもこのような誤りに陥っている。例えば次の文言を見よ。

「興味深いのは、マルクスが価値規定の本質的条件としての交換可能性について行っている詳論である。マルクスは、次のように言うリカードを支持する。即ち、ある商品が所与の費用で製造されるのは、それがこの費用で生産されるからではなくて、その費用で売られ得るからである、と。しかしながら、マルクスによれば、このことから生じてくるのは、次のこともまた同様に確実だ、ということである。即ち、ある商品は、その生産費用の故に、ある価値をもつのではなくて、それが一定の生産費用と交換され得るからである、と。この交換可能性と等価物の創造を、リカードは全く視野の外に置いている。労働時間が、価値の、即ち、交換で第三の商品に与えられる商品の量の、尺度であるとするならば、「価値の尺度は、価値ではなくて、測られる物であるということ、また、諸商品が相互に交換される量が測られ得るためには、それらがなによりもまず、交換されねばならないということもまた確実」である。それ故、交換可能性と伴に、商品の価値付与性が始まった」[Tuchscheerer, *ibid.*, S. 253. 二重下線は橋本]。

二重下線を付した一文からも分かるように(この部分は、マルクスの叙述 [1] S. 810) を、トゥーフシェラーが地の文に入れているもので、マルクスの主張と見てよい)、マルクスは、リカードの投下労働価値論自体を否定し去っているのではない。リカードが投下労働量からする価値規定のみを主張し、その労働が社会的必要労働であるか否かに全く無頓着な欠陥を衝いているのである。

労働量が価値を規定する、というのは経済学の初歩の初歩であって、労働を重視する『経済学・哲学手稿』以来のものであったと推定しなければならない。マルクスの文言にある一見リカードの投下労働価値論を否定しているかのような見解は、上に見た社会的必要労働という観点のリカードにおける欠落に対しての批判であって、この点からすれば、マルクスは、その初期にあつて既にしてリカード価値論を継承(受容) = 克服(止揚)していたと推定すべきである。

こうした見地は、『要綱』におけるリカード批判(「彼(リカード)の経済学では、貨幣と交換そのもの(流通)は、純粋に形式的な要素としてしか現れず [……]」[MEGA² II/1. 1, S. 243]、「交換全体は、(リカードの考え方全体において)それがより大きな物質的多様性を創り出さない限り、名目的である」[*ibid.*, S. 248])という叙述にも連なるものである。リカードでは、投下した労働が、商品の販売不能によって、無に帰するなど、予想もつかないのである。

理論展開とはなっていないのである。この点が、『要綱』「序説」での熟慮⁹⁷をも経て、『要綱』時点では十分に、配慮されることになるのである。それと共に、恐慌についての位置付けは、体系の最終範疇であると同時に、各論理次元の均衡破綻の際のエレメントの役割を果たすものへ、と整序される。したがって、ここでの「交換可能性」の問題なども、商品・貨幣論の内に、恐慌の抽象的可能性として据えられるのを端緒として、恐慌論体系の軸芯として貫かれることになるのである。

続いて、「リカード抜粋」では、まず、リカードが「彼の意味での「富」の生産ではなくて、「価値」の生産が問題であることを、認めている」[S.806; S.366]箇所が抜粋され、リカードにおいてもやはりブルジョアの本音が覗いていることを指摘する。

さらに、この評注部分全体の直前に記されていた評注（本稿60/61頁参照）とも関連する、自然価格と市場価格との連関について、歴史的に検討している、この評注の第4の、即ち最後の部分が記されてゆく。

そして、次の項目「需要と供給が価格に及ぼす影響について」では、同名の『原理』第30章を対象として、競争次元と生産次元との規定関係が問われてゆく。

（4）小括

以上の「価値（自然価格）と富との区別」と題されたマルクスの抜粋と評注の展開は、そこに種々な要因を混在させてはいるものの、大筋、次のような内容として理解することが許されよう。

即ち、まず、リカードとは異なって、価値次元と価格次元とを区別するという文脈にあることから、この根音が一貫して基底に響きわたっていることに留意しておく必要がある。リカードはこの両次元を混同（同一視）しているが故に、価値・資本の増加について誤った把握に陥っているのであり、この整序、正しい価値・資本増加の問題設定の確保がマルクスによって行われてゆくのである。

それはまず、リカードの価値と富との区別を受容するところから始まるが、同時に、その誤りを徹底して批判する。その際、生産力増大による同一量の生産物の価値低下が契機となっている〔価値論〕。

さらにマルクスは、価値と富とのリカードの区別を、単に区別に留めず、恐慌に至るまでの様々な矛盾を孕む、ブルジョア社会に特有の対立として把握する。その際、やはり、両者に異なった影響を与える生産力増大に着目するのであって、そこから、“賃金基金説”的なリカードの富観を批判し、また、生産過程における機械の作用と人間労働との区別を正しく認識したうえでなければ行い得ないような抜粋をも記している〔剰余価値論〕。

次に、リカードの資本規定を考察しながら、その素材的把握とそこから招来する“賃金基金説”を批判し、さらに、リカードの追加的資本規定を考察するに及んで、その資本増加論の混乱を整序するに至る。リカードに混乱を来たした一大原因は、労働者を雇用すべき生産物量〔賃金基金〕の

⁹⁷ あまりに簡略な記述ではあるが、前掲、拙稿「経済学の批判と疎外＝物神性論」164頁を参照されたい。

増大を追加資本と誤認したことであった。マルクスはそれを古い資本の生産力の増大、と正しく把握し、そこから生じてくる新たな誤導要因であるところの特別（超過）利潤の誤った把握をも、先回りして批判するために、次のように正しく把握してゆく。それは、ブルジョア的私的生産に特有の、生産力の一面的増大の一結果に過ぎないのであって、真の価値増大ではない、という論証である。したがって、真の価値・資本の増大は、やはり投下労働量（それも社会的に有用と認められる）の増大に、その源泉を見出す以外にないことを明らかにして、リカード価値論の真髓を継承・擁護するのである。こうして、リカード価値論、等価交換に基づいての、価値・資本増加のいかにして、への問題設定が為され、この解決が目指される土台を確保するわけである。

この展開での主要な基準となっているのは、一つには、根音としての価値次元と価格次元の区別と、その関連への注目であり、今一つは、『哲学の貧困』や「賃労働と資本」にも見出された、商品・価値論→剰余価値論→蓄積論、という経済学批判の体系構成である。さらに、ここでは、この体系を貫く軸芯として、価値と富との区別が据えられ、これは発展して、ブルジョア的生産の特殊歴史性把握、恐慌へと至り着く道、また他方、労働の二重性把握という遡行の道をも用意し始めているといえよう。以上のような内容が充たされることによって、遂に、価値と価格両次元の区別も、単に価値と価格の区別に留まらず、増大する価値を剰余として把握し、その他の諸所得から区別する余地をも拓いていると見てよい。

3. 諸見解の検討

このマルクスの抜粋と評注について、トゥーフシェーラーは、次のような評価を与えている。即ち、

「リカードの理論によれば、諸価値の生産はより多くの労働が生産に投入されることによつてのみ上昇されうる、というのに対して、マルクスによれば、諸価値の生産は、労働の生産力の均等でない上昇によつても高められうるし、また高まるであろう、とする。リカードによれば、例外的な生産力の充用は、利潤の自然的率を超えて存在するところの剰余あるいは特別利潤を実現する。しかしながら、そうした充用が、こうした剰余を獲得するのは、この価値が他から奪われるが故である。それ故に、リカードにとっては、分配だけが問題なのである。しかし、マルクスによれば、例外的な生産力の労働は、同時に、より高い価値を生産する。マルクスは、これを繰り返し強調し、そして次のように明瞭に語る。即ち、このことが起こるのは、「資本の生産力の増加が、常に一面的であり、それ故、当初は、価値の増加でもあること」[1] S.805] によつてであり、これによつて「価値創造が生ずる」。同じことは、マルクスが示しているように、世界市場での例外的な一面的生産力にも、当然に妥当する。マルクスはここで、「賃労働と資本」において述べた思考をさらに展開し、例外的生産力の労働を、数倍化された労働として考察している」⁹⁸。

⁹⁸ Tuchscheerer, *ibid.*, S. 324/325.

「賃労働と資本」のさらなる展開であるのはその通りであるにしても、どのような意味においてであろうか？ 特別利潤発生機構だけならば、既に「賃労働と資本」で一応の成果を取っており、その観点のみから「リカード抜粋」を見ても、単なる再論としか位置付け得ないのではないかと。トゥーフシェラーは、評注の独自性を、マルクスがリカードとは異なって、生産力の増大による価値増加を強調する点に見ているが、本評注でのマルクスの最大の主張点、価値増大は社会的に必要な投下労働量の増大にあり、という点を全く見落として、この結論に至る途中の媒介の論理に囚われてしまったのである。また、マルクスが「価値創造 (Werthschöpfung)」と述べる場合、それは地代と類比され、「地代の場合と同様に価値創造が生ずる」[S.805; S.365]としている含意を全く理解していない見方と言えよう。このような理解の基盤は既に彼の1840年代のマルクス把握にある⁹⁹。

この評注部分の結論とそこに至る媒介の論理との軽重を混同し、後者をのみ強調し、前者を捉え損なうのは、何もトゥーフシェラーにのみ限ったことではない。シュラーダーも同様である。

シュラーダーは、われわれが次項3において対象とするところの「V. 利潤について」のうち「利潤と労賃との関係」の項目への評注をも考察した後、「リカード抜粋」におけるマルクスの研究の全体的な特徴付けを次のように行っている。

「ノートⅧのなかでのリカードからの抜粋への評注に際して、差額地代にならった交換価値増加モデルの廻り道を越えて、労働価値論との一致のうちに見出され、なんらの不明確さも自己矛盾も含まない賃労働と資本との関係の解明に、マルクスは、はじめて、到達している」¹⁰⁰。本稿も、この結論そのものに異を唱えるわけではない（後論79頁参照）が、本稿において以上に検討してきたところから明らかなように、「廻り道」としている、シュラーダーの評注の特徴付けについては、トゥーフシェラーに対してと同様の批判が成立し得る。

シュラーダーがこのような評価を下すのは、この評注に対する次のような把握に因る。即ち、整理するならば、以下に示すようなほぼ3点の欠陥を依然として抱懐していると言うのである。つまり、1. 「剰余利得」の調整によって、価値は「同じ割合で増加し続けはしない」と言うが、この場合、それでは、価値がどのようにして増加し得るのかは明白でない。2. 利潤率の上昇を述べるが、上昇の前提としての利潤そのものの存在を明らかにし得ていない。3. マルクスが明らかにしているのは、個別的・短期的な価値増殖のみであり、またこれに対応する特別利潤を生産力の上昇によって説くのみであって、社会的・長期的な価値増殖は説明していない。——と言うのである。したがって、全体としては、

「マルクスは、今やなるほど、リカードに反し、資本を価値額として、また、資本の増加を価値の増加として把握しようとするが、しかし、リカードに倣って、生産力の発展から解明しようとしている。その意に反して、マルクスは、個別的利潤の短期的増加の可能だけを解明す

⁹⁹ 前掲、大石高久「成立史に見る価値概念と疎外論」を参照。

¹⁰⁰ Schrader, *ibid.*, S. 156.

るのみであり、利潤そのものを解明しない]¹⁰¹、
ということになるわけである。

シュラーダーが3点指摘する欠陥のなかには細かな点で聞くべきものはあるけれども、リカードが追加的資本とみなす事態を、そう把握してはならないとして、生産力上昇による一時的・個別的な特別利潤の論理を示し、リカード批判を根拠付けている文脈であるわけだから、そもそもマルクスの積極的な利潤の発生機構の説明を求めても無理なのである。

4. 価値増加問題の解決の基本論理、剰余価値論の諸要素の萌芽

本節第2項において見てきた評注は、価値の増加・資本の増加を問うていたにしても、その主眼は、価値次元と価格次元を弁別し、それらの絡み合いを明瞭にして、リカードの価値・資本増加把握を批判し、正しい問題設定を確保するところにこそあり、そもそもマルクス自身の価値増加についての積極的な見解を見出せる場所ではなかった。これは、リカード『原理』の体系を批判してゆこうとする、ここ抜粋におけるマルクスの意図のしからしめるところであったろう。

では、どこで、マルクス自身の価値増加・資本増加に対する積極的な見解が見出されるのであろうか。それは、本項で検討するところの、「V. 利潤について」の第2細目「利潤と労賃との関係」¹⁰²に付されている評注においてである。思うに、ここ「V. 利潤〔剰余価値と読め¹⁰³—橋本〕について」では、資本家の剰余がそのものとして考察されるからである。

(1) 剰余価値概念の萌芽の形成

抜粋細目「利潤と労賃との関係」は、『原理』からの次のような三つの抜粋がまず記され、それにマルクスの比較的長い評注が付される形となっている。

まず第一の抜粋には、『原理』第1章「価値について」第3節「商品に直接使用される労働ばかりでなく、このような労働を助ける、器具、道具、および建物に投下される労働もまた、商品の価値に影響を及ぼす」からのものである。たとえ労賃の騰貴があっても、それに比例する利潤の低落によって、商品の相対価値にはなんらの変化もない、という趣旨の抜粋が為されている。商品価格

¹⁰¹ Ibid., S. 154.

¹⁰² 「リカード抜粋」53頁（マルクスのノートの頁付け）にも、これと類似の表題「さらに利潤と労賃との関係についての注記（Noch eine Bemerkung über das Verhältnis von Profit und Arbeitslohn）」[1] S. 825]が存在する。しかし、邦訳が「利潤と労賃との関係についての再注」としているのはなぜであろうか（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店1962年、932頁、深町郁弥訳。また、同じ訳者による『マルクス＝エンゲルス全集補巻3』大月書店1981年、129頁でも同様）？ というのも、深読みすれば、単に noch の訳語の相違ではなくて、複雑な構造をもつ「ノートⅧ」であるが故に、訳者は、「V. 利潤について」「利潤と労賃との関係」（57/58頁—マルクスのノートの頁付け）をマルクスが書き終えた後、53頁の余白に戻って、「再注」を書き付けた、と推定している、とも推測し得るからである。が、本稿ではむしろその逆で、53頁にある「さらに利潤と労賃との関係について」に誘発されて、あるいは、それを布石として、「V. 利潤について」に移行してゆくものと推定したい。

¹⁰³ マルクスの理解は、Das Kapital, MEW, Bd. 23, S. 539等を参照されたい。

という表象から、その価値構成部分の労賃と利潤との関係へと分析を深めているものと言えよう。

第二の抜粋は、『原理』第7章「外国貿易について」からのもので、利潤は、実質賃金（年々労働者に支払われ得るところの全額を取得するのに必要な労働日の数）に依存するのであって、名目的には相違していても、異なった二つの国で、賃金が正確に同一であることが可能なこと、——これらを内容としているものである。利潤の賃金への依存性という点に注目したい。

第三の抜粋は、『原理』第32章「地代についてのマルサス氏の意見」からのもので、賃金と利潤との反比例関係が指摘されている一文である。賃金と利潤との敵対性に着目している点に注意したい。

これらの抜粋は、マルクスの次のような意図の下での配列であるように思われる。即ち、商品の相対価値という現象から、それを構成する賃金と利潤という本質的な関係に歩を進めて、両者の割合の変化が、現象しないこともあり得ることを示し、次いで、この賃金と利潤との関係項の内、一次的なものは賃金であることを示したうえで、それ故の労賃に対する利潤の依存性を明らかにし、さらに、そこから、両者の敵対的な関係をまで示すに至る。

これに対するマルクスの評注を、以下検討してゆくことにしよう。

まずはじめに、「リカードの大部分の論敵——たとえば、ウェークフィールドのような——は、リカードが剰余（das surplus）を説明できていないと主張する」[S.828; S.413]と記す。この注記は、後の『要綱』において、「価値の発生を理解するのが困難であることは、[……]リカードが剰余を把握しなかった、つまり剰余価値（Mehrwert）を把握しなかった、といて彼を非難している近代のイギリスの経済学者たち（マルサスの価値論を見よ。彼は少なくとも、学問的な手順を踏もうと努めてはいる¹⁰⁴）を見れば、判ってくる」[MEGA² II/1. 1, S.242]と述べているのと同じ趣旨であろう。『要綱』では、「学問的な手順を踏もうと努めている」マルサスが例として挙げられているが、ここ「リカード抜粋」においては、ウェークフィールドであって、シュラーダーの言うように「おそらく、抜粋ノートⅦに書き留めた、スミス『国富論』のウェークフィールド版におけるその注記を唆している」¹⁰⁵と見てよいであろう。労働が一つの商品として扱われ、他方、その労働の生産物もまたもう一つの商品として扱われる際、これら二つの商品の価値が、同一労働量によって規定されるとしたならば、資本価値の増殖は不可能であることを、ウェークフィールドは述べたのであった。

したがって、ここでマルクスは、この「ウェークフィールドの批判を、単なる主張とのみみなし、そうして、以前に引用したリカードの命題「I. 価値について」で抜粋している「リカードの価値規定の場合の前提」[S.787; S.326]——橋本に明らかに依拠して、ウェークフィールドの非難をはね返そうとしている」¹⁰⁶とまで言いきることはできないまでも、「筋道立った立証をなお欠いて

¹⁰⁴ Malthus, Th. R. 三邊清一郎訳『マルサス・価値尺度論』実業之日本社 1944年、「緒言」（33頁）における問題設定など。

¹⁰⁵ Schrader, *ibid.*, S. 154.

¹⁰⁶ *Ibid.*, S. 155.

はいるものの、マルクスは、価値法則が侵害されることなしにどのようにして資本と労働が相互に交換を行うのか、を解明しようと試みた¹⁰⁷と見ることができる。

それ故、まず、機械20ポンド、原材料30ポンド、労賃50ポンド——総計100ポンドを投下して、製造された商品を110ポンドで販売する例を設定し、110と100の差額、10ポンドについて、「どこからこの10ポンドは来るのか？」[S.828; S.413]と問いを発する。そうして次に、機械50ポンド、原材料30ポンド、労賃20ポンド——総計100ポンドで、やはり同じく110ポンドで販売される例を挙げ、同じく差額の10ポンドに注目しつつも、今度は、特に労賃との関係に注意を向け、「この10ポンドはどのように労賃と関係しているのか？」[S.829; S.413]と、さらなる問いを発している。

ここで注目すべきは、第一に、資本の価値構成が二つの例で異なっていることであり、第二に、剰余と労賃との間の関係が問われていることである。資本構成および剰余価値率さらに、資本構成の変化に応じての剰余価値率の変化、これらの萌芽的の把握の形成といえよう。

続く評注の一文では、資本家にとっての利潤という意味が明らかにされる。即ち、

「彼の利潤は、確かに彼がどれだけでこの100ポンドを販売するかに依存しているのであって、彼にとって労働がどれだけを要費するかに依存しているのではない」[ibid.; ibid.]。

これは、シュラーダーも言うように¹⁰⁸、『要綱』での以下に示す記述に明瞭に現われるところの、商品の現実的な生産費と、資本家にとっての生産費との相違に、気づき始めている証左ということができよう。即ち、

「資本家は、それ故、商品をまさに高く売るのでなく、価値通りに売るのである。資本家の利得は、1ポンド（綿糸）あたりを高すぎる値段で売ることから生ずるのではなくて——彼はそれを正確にその価値通りに売る——、むしろ、彼にとって要費する（単に要費するといふのでなく……）生産費以上に売ることから生ずる」[MEGA² II/1. 2, S.342]。

この「リカード評注」では、先にも述べた（70頁）「交換可能性」の問題のようにブルジョア社会の商品生産の特殊歴史性をとりわけ強調する「リカード抜粋」全体の印象¹⁰⁹からすると、一見した限りでは、むしろ生産過程よりも流通過程を重視しているかのようにも受け取られかねない。しかしながら、マルクス自身もまた次に流通過程での剰余の発生の可能性を総覧してゆきはするものの、結局のところは、再び生産過程へとたどり着くのであって、それ故に、ある意味では、自分の真の見解を提示する前の露払いと見ることも出来よう。その総覧の大筋を示せば次のようである。

まず、「それでは商業から来るのか？しかし、誰が彼にこの10ポンドを支払うのか？」[S.829; S.413]と問う。彼、商人もまた誰かから受け取っていないわけである。結局、消費者ということになるが、その内実は、それぞれ、地代、利潤、労賃を所得とする地主、製造業者、労働者の他ではないわけであって、「支払われるのは元来それを製造過程ですでに生産していたか

¹⁰⁷ Jahn / Noske, ibid., S. 59.

¹⁰⁸ Schrader, ibid., S. 165/166.

¹⁰⁹ 前記脚注96参照。

ら」なのである。また相互のだまし合いも、それらの人のうちの「だれかの手に剰余が残るためには、剰余はそれ自体として存在していなければならない」[ibid.; ibid.]。したがって、「個別的な超過利潤を商業から説明することはできるけれども、剰余は、商業からは説明されえない。また、産業資本家の全階級の剰余を問題とすると、そのことははじめから消失する」[ibid.; ibid.]。とにかく、不平等な分配であるにしても、分配される以前にその剰余の部分が「生産から生じなければならぬし、したがってはじめてから利潤または賃金の控除でなければならない」[ibid.; S.414]のである。——こうして、流通は問題外とされ、剰余の源泉は生産の中に求めるしかないことが明らかにされる。

上の過程中、剰余 (surplus) という語が、地代、利潤、さらに超過利潤とも異なる範疇として、後の剰余価値と同一の内実をもつものとして、用いられていることに注目しておこう。

剰余の源泉として今や、流通は排除された。そこで、次に排除されるのは、次のような見解である。

「総生産物が増大すると、資本家は100を投下し、量の上で110の生産物を取得する。したがって彼がすべてを補填した後は、彼には10が残っている」[ibid.; ibid.]。

これに対して、マルクスは次のように反論する。即ち、「ここでは価値が問題である」から、上の見解のような素材的な観点は無意味だ、という主張である。続けてさらに、この価値という観点からする問題把握をより一層深めてゆく。即ち、

「そして価値は相対的なものである。即ち、それは量ではなくて、第三者に対する量の関係である。この第三者は、労働者階級だけでありうる。利潤の価値が増大するためには、その価値が低落する第三者が存在していなければならない」[ibid.; ibid.]。

マルクスにあっては、早くから、あらゆる経済的諸範疇は、生産関係の反映であった。価値も例外ではありえず、ここでも価値は関係性の中で把握され、単なる量ではなくて、第三者に対する量の関係なのである。そしてこの第三者が労働者階級へと絞られてゆく。

この限定を例証しようとして、マルクスは新たな数字例を挙げる。総資本100——機械20、原材料30、労賃50、の投下で、110に対して販売したいという場合である。で、このとき、「もし資本家が〔50ではなくて〕60を労賃に支出せざるを得なかったとすれば、資本家は、110以外に、[……]全く利潤を取得しない」[S.829; S.414]と述べる。

つまり、先の所で、資本の構成を変えて、異なった投下量となった労賃額（50ポンドから20ポンドへ）と剰余10ポンドはどのように労賃と関係しているのか？」[ibid.; S.413]と問うたのに対する解答が、今ここで展開されているわけである。

続けて、マルクスは、またもや、交換では、どこまでも等価交換しか行われぬことをダメ押しする。即ち、

「資本家は、彼の生産物を、費やされた労働時間によって価値が規定されている他の生産物と交換する。資本家は、たとえば20労働日の一生産物を販売する。そして、その20労働日の生産物と交換に、同じもの〔別の20労働日の生産物〕を手に入れる」[ibid.; S.414]。

これでは、当然のことながら、剰余など成立するはずもない。そのためこう記す。「剰余は、交換ではじめて実現されるものであるとはいえ、この交換では成立しない」[ibid.; ibid.]と。

それでは、剰余は、どのようにして成立するのであろうか？

「剰余は、20労働日を要したこの生産物のうち、労働者が、10等々の労働日の生産物だけを受け取る、ということで成立するのである」[ibid.; ibid.]。

この一連の展開過程で、まず注目しておかなければならないことは、労働者階級に対しての量の関係であるとされた価値が、さらに生産物量から労働日、労働時間量に還元されていることである。その上で、その価値の低落を、労働者の受け取る生産物に要した労働日と、全生産物に要した労働日との差の存在によって説明していることである。

リカードに則れば、価値は、投下労働量によって決まるのであったから、以上のようにして一旦確保された価値の実体としての投下労働時間の差は、今度は、単に資本家対賃労働者の間の比率としての交換価値という把握に回帰するのではなく、労働者の商品である労働の生み出す価値量と、その労働の受け取る価値量という、絶対量同士の対比に必然的に推移してゆかざるを得ないのではないか。そして、ここでもあくまで等価交換の法則に即してゆこうとするならば、労働者がその商品たる労働を労働者の生活必需品と交換する場面と、その労働が実際に機能する場面とは、分離されねばならなくなるであろう。このような分離は、ヘーゲル哲学にファミリアなマルクスにとって、その「力とその発現の関係 (das Verhältnis der Kraft und ihrer Äußerung)」を応用することで比較的容易に行われたであろう¹¹⁰。

したがって、マルクスはこの評注において、資本の構成、剰余価値率、労働日の内実、など、剰余価値論の基本的諸要素を確保し、さらに、その他の諸要素獲得への道を拓いており、剰余価値論の萌芽と特徴付けてよいであろう。しかし、この段階では、労働過程と価値増殖過程の区別、労働による不変資本価値移転の特質など、総じて商品に表われる限りでの労働の二重性把握によってこそはじめて明らかとなる諸要素を欠いているため、未だ十分な剰余価値発生機構の解明とはなっていないことは言うまでもない。

それ故、この評注部分の末尾に記されている、「労働の生産力が增大すると同じ割合で、労賃の価値は減少する」[S.829: S.414]という一文は、前項で見た先の評注部分での生産力の増大によって生ずる価値の増大のいかにしてを、この評注で得られた論理の中で解明しようとする一步を示していると言えよう。つまり、この評注での、いわば絶対的剰余価値生産（より正確には剰余価値生産一般か [?]）についての萌芽的解明から、相対的剰余価値生産の解明への展開である。が、その際、マルクスに剰余価値生産の解明を促進せしめた触発因は、相対的剰余価値生産、生産力の増大にあったということに留意したい。

¹¹⁰ シュラーダーは、ヘーゲルのみならず次のように述べる。「マルクスの本来の功績は、ある種の純粋に概念的な諸革新にあるのではない。たとえば労働力能の概念は、難なく、ヘーゲルやA. ミュラー、L. シュタインから導き出され得た」[Schrader, ibid., S. 168]。

(2) 「リカード評注」の形成史的位罫

さて、次に、以上に見てきた評注について、諸見解を参考にしなが、既に少なからず留意してはきたものの、その形成史的位罫について補っておこう。

まず、シュラーダーのこの評注についての全体的な評価は次のようである。

「この評注でもって、萌芽的に、マルクスの理論形成における一つの決定的な問題が解決された。即ち、この評注は、剰余価値論、剰余価値と利潤との区別、相対的剰余価値と絶対的剰余価値の生産の区別の基本的契機を含んでいる」¹¹¹。

これについて、本稿では、先に示したように、労働の二重性把握に基づく諸要素の確保という意味での後の時期のような高い水準においてではない、との点に留意すれば、ほぼ首肯しうる評価である、と判断する。

シュラーダーの見解の細部に立ち入ってみれば、次のような諸点が問題であろう。

まず、剰余の源泉を、流通の領域から次第に生産の領域へとマルクスが移行させてゆく際に、「その定式化においては、なお明らかにためらいつつ (noch sichtlich zögernd)、続けている」¹¹²と見る点である。本稿では、先にも触れたように、「ためらいつつ」などではなくて、マルクスが自己の見解を提示してゆく前の露払いとでも位置付けるべきであろうと考える。この点では、おそらくシュラーダーにあっては、「リカード抜粋」全体の性格をどのように見、各々の評注をそこにどのように位置付けるかという理論的把握が欠けている (少なくとも明示的には提出されていない) という、資料実証家に特有の弱点がかえって露呈しているように思われる。

次に、これはシュラーダーの読みの鋭い点でもあるのだが、この評注全体を見る限りでは、末尾の一句「労働の生産力の増大」と、生産領域への移行の冒頭部での「総生産物の増大」の2点にしか明示的には現われていない生産力上昇の問題の伏在を見抜いている点である。シュラーダーは、評注の最後のパラグラフを全文引用した後、次のようにパラフレーズする。

「この部分では、マルクスは、利潤の起源に関する問い、そして、価値がどのようにして増加するかという問題に、数頁前での〔本稿では、前項2において検討した評注を指す——橋本〕とは異なるパースペクティブで取り組んでいる。

——はじめに、マルクスは、資本投下、生産過程の帰結、そして利潤を、絶対的生産量の相において考察しているが、その際、彼は、[……]「総生産物の増大」と伴に、生産力の上昇を対象としている。

——引き続き思考経過で、マルクスは、価値量よりも生産物量を扱い、さらに利潤の価値の増加を、労賃の価値の低下との関係に置いている。

——この関係について、マルクスは、続けて二つの例を挙げる。第一の例は、二重に解釈され得る。即ち、〔一つめの解釈は——橋本〕もしマルクスが上述のように利潤を生産力の上昇か

¹¹¹ Ibid., S. 156.

¹¹² Ibid., S. 154.

ら説明しようとしているのだとすれば、その場合、マルクスは、リカードにより、増大した総生産物の価値は同一のままである、ということを知っている。しかしながら、総生産物の価値のうちの賃金価値の部分は減少するのであり、そうして、この差額から利潤が生ずる、または、増大するであろう¹¹³。

シュラーダーには、このように生産力上昇による特別利潤把握を強調する視点があるために、そもそも「リカード抜粋」を見るに際して、とりわけ先の評注と、この評注とにのみ注目するということにもなるのであろう。しかしながら、「二重に解釈される」としているうちの一つの目の解釈は、それこそシュラーダーの「過剰解釈」なのではなかろうか¹¹⁴。

次に、W.ヤーン/D.ノスケの評価を見よう。

この評注の意義は次のように評価されている。即ち、「剰余」を流通（単純な商品交換）から導くのではなく、労働者に対する「特殊な関係」¹¹⁵から説明しようとしている点、また「剰余価値を、利潤の形態とは既にして独立な「剰余」という概念の下、資本が賃労働者に不払労働として行わせる剰余労働と、把握した」点を、「剰余価値論の基礎付けにあって一つの大きな歩みを進めた」としている。

が、「それにも拘らず、この認識の進歩によって、剰余価値論の科学的な基礎付けは、なお完成してはいない、否、それどころか、決定的な躍進が果たされていない」として、この評注の限界を以下のように把握している。即ち、象徴的なのは、「労働力ないしは労働力能」語の欠如であって、このために、「労働力商品の購買の際に生ずる所有の転回の正当な内容把握、ならびに、資本家的生産における単純流通からの、価値形成＝価値増殖過程の正当な分析への移行も、全くもって問題にされていない」と言うのである。そしてこの原因を、彼らは次のように見る。即ち、

「労働過程と価値増殖過程との統一としての資本家的生産過程にとって、商品、価値、および貨幣が前提されるので、資本家的生産過程にとっては、資本家的生産様式の抽象的領域としての単純流通の把握が先行しなければならなかった。マルクスは、1851年には、これら両者の根本的な論理的矛盾を、未だ首尾一貫して解決することはできなかった。というのは、彼は当初、単純な諸前提を最後まで考察してしまう前には、リカードと同様、それらを複雑な形態において解決しようと試みていたからである」¹¹⁶。

意義の評価そのものには異論はないが、この評注の最大の重要点と見るべき労働日に還元しての剰余把握を、強調していないのは不可解である。

限界の判断については、まず、労働力範疇の欠如そのもののみを強調する点に対して、シュラーダーの批判（前記脚注110参照）がやはり妥当するであろう。また、マルクスが「単純な諸前提を最後まで考察してしまって」はいない（その指標は労働の二重性把握と言ってよかろうが）のは当

¹¹³ Ibid., S. 155.

¹¹⁴ Ibid., S. 258, Anm. 28.

¹¹⁵ Jahn / Noske, *ibid.*, S. 59. 本文の次の段落における引用も同じ頁から。

¹¹⁶ Jahn / Noske, *ibid.*, S. 59/60.

然としても、そこからそのままストレートに、「リカードと同様、それらを複雑な形態において解決しようと試みていた」という帰結を引き出すことができるであろうか。そうした見方では、価値次元と価格次元とを弁別して、価値増大の源泉を見出そうと努めてきたここ「リカード抜粋」でのマルクスの営為を、なんら評価し得ずに捉え損ねてしまうことになるのではなかろうか。ここには、本節第1項でも示した、「リカード抜粋」の構成とその抜粋意図についての理論的評価の相違が現出しているのである（なお前記脚注78, 85, 92, 96および本文79頁をも参照されたい）。

結 第三の課題への対応 今後の研究課題の設定

本稿において検討の対象としてきた1840年代後半、1850年代初め、それぞれの「経済学批判」形成過程における位置付けは、その都度ふれてきたところでもあり、ここでは、分析視角とした「資本の価値の増大について」部分のその後の展開について若干記して、第三の課題に対応し、結としたい。

1840年代後半の著作である『哲学の貧困』や「賃労働と資本」において、「公共の富の増大」や「生産的資本の増大」として把握されていた資本の価値の増大についての問題は、1851年の「リカード抜粋」に至り、労働の二重性、労働過程と価値増殖過程の区別、労働による不変資本の価値移転過程への生産力上昇の影響等の萌芽の把握、および剰余価値、相対的剰余価値の生産、絶対的剰余価値の生産を正確に理解する方向への発展をそれぞれ展望させる、剰余概念の成立、生産力の上昇把握、労働日の内実把握によって、「経済学批判」体系の主要な論理次元を分出させつつある。

価値法則に立脚した上で、賃労働と資本の交換把握を、したがって価値増殖機構を解明するマルクスの道程については、この「リカード抜粋」直後の「ロンドン抜粋ノートⅨ, Ⅹ, Ⅺ」における「経済学者たちに対する反対論（リカード理論を基礎とする）」と後に位置付けられる作家たちからの抜粋の検討を必要とするもの¹¹⁷、1850年代後半以降の「資本の価値の増大について」の問題に関するマルクスによる解明の展開は、次のように把握されるべきかと思われる。

それを、本稿を続行するとすれば記されなければならないであろう構成目次として示せば、以下のようなであろう。

いずれの項目も筆者の今後の研究課題である。

（Ⅲの続き）

付論 リカード派社会主義の位置（「ロンドン抜粋ノート」と『経済学批判要綱』・『剰余価値学説史』）

Ⅳ 1850年代後半（『経済学批判要綱』）における資本価値の増大把握

¹¹⁷ ちなみに、ノートⅩⅢの研究として、森下宏美「「ロンドン・ノート」における人口論研究」『経済』第81号、新日本出版社2002年6月、141～152頁がある。

1. 労働日把握と生産力（「ノートⅢ」におけるリカードの把握との差違）
2. プルジョアの生産の特殊歴史性把握（「序説」における「経済学の方法」）
3. 労働の二重性把握の端緒的確立（「貨幣に関する章」）
4. 剰余価値論の基本的諸要素の形成（「資本に関する章」「資本の生産過程」）
5. 「資本価値の増大について」問題（剰余価値論からの蓄積論の分出）

付論1. 「資本の生産過程から流通過程への移行」部分の孕む諸問題

付論2. 不変資本価値を移転する労働の特質と機械

補論 『経済学批判要綱』 価値増加論と『経済学批判』 「序言」 “唯物史観の定式”

V 「資本価値の増大について」部分の展開

1. 『経済学批判』 「原初稿断片」と『経済学批判。第1分冊』における労働の二重性把握
2. 剰余価値論確立への模索（「プラン草案」と「心覚え」）
3. 剰余価値論の確立（『1861-1863年手稿』 ノートⅠ～Ⅴ）
4. 再生産論の形成過程と不変資本部分の価値・素材補填（『1861-1863年手稿』 ノートⅧ～Ⅹ）
5. 蓄積・再生産論の分出とそこでの生産力増大の及ぼす影響（『1861-1863年手稿』 ノートXXII）

付論 『1861-1863年手稿』 ノート XII/XIII におけるリカード理論の揚棄

VI 『資本論』における資本の価値の増大問題の解決

1. 労働の二重性把握と価値・使用価値に及ぼす生産力の影響の確定
2. 剰余価値論の完成（労働力の価値規定・労働日・特別剰余価値）
3. 蓄積論の完成（蓄積規模の規定因としての生産力）

引用文献一覧

1. マルクス、エンゲルスの古典

省略記号

MEGA¹ Karl Marx, Friedrich Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Frankfurt / M., Berlin, Moskau 1927-1935.

MEGA² Karl Marx, Friedrich Engels, Gesamtausgabe, Berlin 1972ff.

MEW Karl Marx, Friedrich Engels, Werke, Berlin 1956-1990.

Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie. In: MEW, Bd. 1, Berlin 1956.

Ökonomisch-philosophische Manuskripte, MEW Ergänzungsband Erster Teil. [Bd. 40]

Exzerpte aus Xenophon von Athen: Werke, David Ricardo: Des principes de l'économie politique et de

- l'impôt, und James Mill: *Éléments d'économie politique*, MEGA² IV/2.
Deutsche Ideologie, Manuskripte und Drucke (1845 – 1847). In: MEGA² I/5, Berlin/Boston 2017.
- Misère de la philosophie. Réponse à la philosophie de la misère de M. Proudhon (1847), (Fac-similé), Tokyo 1982.
- Arbeitslohn, MEW, Bd. 6, Berlin 1961, S. 535–556.
- Rede über die Frage des Freihandels, gehalten am 9. Januar 1848 in der Demokratischen Gesellschaft zu Brüssel, MEW, Bd. 4, Berlin 1977, S. 444–458.
- Lohnarbeit und Kapital, MEGA¹ I/6, Berlin 1932, S. 473–499.
- Marx'Sachregister zu Ricardo: *On the principles of political economy and taxation*³, London 1821. In: *Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie (Rohentwurf) 1857 – 1858. Anhang 1850 – 1859*, Berlin 1974.
- Aus Exzerptheft VIII: Ricardo (David). *On the principles of political economy and taxation*³, London 1821.
In: *Ibid.*
- Exzerpte aus David Ricardo: *On the principles of political economy*. In: MEGA² IV/8, Berlin 1986.
- Karl Marx *Ökonomische Manuskripte 1857/58*, MEGA² II/1. 1–2, Berlin 1976/81.
- Zur Kritik der Politischen Ökonomie. Erstes Heft, MEGA² II/2, Berlin 1980.
- Referate zu meinen eignen Heften. In: *Ibid.*
- Karl Marx Zur Kritik der Politischen Ökonomie (Manuskript 1861 – 1863). In: MEGA² II/3. 1–6, Berlin 1976–82.
- Das Kapital, Kritik der politischen Oekonomie¹, (Reprint), Tokyo 1959.
- Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie. In: MEW, Bd. 23, 24, 25, Berlin 1962, 63, 64.
- Der Brief an Marx, [Anfang Oktober 1844]. In: MEW, Bd. 27, Berlin 1963, S. 5–8.
- Der Brief an Engels, 7. Januar 1851. In: *Ibid.*, S. 157–162.
- Der Brief an Marx, 29. Januar 1851. In: *Ibid.*, S. 170–172
- Der Brief an Marx, 19. Mai 1851. In: *Ibid.*, S. 259–261.
- Der Brief an Engels, 24. August 1867. In: MEW, Bd. 31, Berlin 1965, S. 326/327.

2. その他の古典

- Hegel, G. W. F.: *Enzyklopädie der philosophischen Wissenschaften im Grundrisse* (1830). Erster Teil. Die Wissenschaft der Logik. Mit den mündlichen Zusätzen, G. W. F. Hegel Werke in zwanzig Bänden, Bd. 8, Frankfurt/M 1970.
- Lauderdale, 8th Earl of (James Maitland): *An Inquiry into the Nature and Origin of Public Wealth* (1804), (Reprint), New York 1962.
- Malthus, Th. R. 三邊清一郎訳『マルサス・価値尺度論』実業之日本社 1944年。
- Ricardo, D.: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, *The Works and Correspondence of David*

Ricardo, vol. 1, Cambridge 1981.

Say, J.-B. 中野正訳『恐慌に関する書簡』日本評論社 1950年, 「セーの「マルサス氏への手紙」(公開書簡)」。

The Economist, Weekly Commercial Times, Bankers' Gazette, and Railway Monitor: A Political, Literary, and General Newspaper. 1850: December 7, No. 380, (Agriculture. The Adjustment of Farming Contracts.)

————— : December 14, No. 381, (Agriculture. Relations of Landlord and Tenant.)

3. 外語文献 (邦訳含む)

Hecker, R.: Der unvollendete Weg des Kapitals. In: Bouvier, Beatrix / Auts, Rainer (Hrsg.), KARL MARX 1818 –1883 LEBEN. WERK. ZEIT. Große Landesausstellung 2018 in Trier / Rheinisches Landesmuseum Trier / Stadtmuseum Simeonstift Trier, Theiss Verlag 2018, S. 281–289.

Blaug, M.: Ricardian Economics; A Historical Study. 馬渡尚憲・島博保訳『リカド派の経済学—歴史的研究』木鐸社 1981年。

Rubel, M.: Les cahiers de lecture de Karl Marx I. 1840 – 1853. In: International Review of Social History, vol. II - 1957, pp. 392–420.

Jahn, W. / Nietzold, R.: Probleme der Entwicklung der Marxschen politischen Ökonomie im Zeitraum von 1850 bis 1863. In: Marx-Engels-Jahrbuch, Nr. 1, Berlin 1978.

Jahn, W. / Noske, D.: Fragen der Entwicklung der Forschungsmethode von Karl Marx in den Londoner Exzerptheften von 1850–1853. In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 7, Halle (Saale) 1979.

Schrader, F. E.: Restauration und Revolution – Die Vorarbeiten zum „Kapital“ von Karl Marx in seinen Studienheften 1850–1858, Hildesheim 1980.

Stude, K.: Zur Entwicklung der Marxschen Lohntheorie in den “Londoner Exzerptheften” (1850/53) und den “Ökonomischen Manuskripten 1857/58”. In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 8, Halle (Saale) 1979.

Tuchscheerer, W.: Bevor „Das Kapital“ entstand – Die Herausbildung und Entwicklung der ökonomischen Theorie von Karl Marx in der Zeit von 1843 bis 1858, Berlin 1968.

Zimmermann, M.: Marx' Ricardo-Rezeption im Heft VIII der Londoner Exzerpthefte (1850–1853). In: Arbeitsblätter zur Marx-Engels-Forschung, Nr. 8, Halle (Saale) 1979.

4. 邦語文献

橋本直樹 「『経済学批判』の端緒的形成——《パリ草稿》における「私的所有」批判——」 福島大学経済学会『商学論集』第48巻第2号, 1979年10月。

橋本直樹 「経済学の批判と疎外 = 物神性論——経済学的諸関係 = 諸範疇の転倒 (Quidproquo) 構造——」 [編集顧問] 小林 昇・富塚良三・渡辺源次郎, [編集委員] 相沢与一・市川佳宏・下平尾勲・中川 弘・真木実彦・吉原泰助・米田康彦 『講座・資本論の研究』第1巻 中川 弘 編『資本

- 論の形成』青木書店 1981年，第IV章。
- 橋本直樹『『共産党宣言』普及史序説』八朔社 2016年。
- 橋本直樹『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』八朔社 2018年。
- 服部文男「マルクス労賃論の成立過程について——労賃論と資本蓄積論との連繫——」東北大学『研究年報「経済学」』第23巻第2号，1961年11月。
- 中川 弘『『経済学・哲学草稿』と「ミル評註」——「疎外された労働」を中心とした一考察——』福島大学経済学会『商学論集』第37巻第2号，1968年10月。
- 小川浩八郎『経済学と地代理論』青木書店 1979年，第4章「1851年におけるマルクスの地代論書簡」。
- 大石高久「成立史に見る価値概念と疎外論——トーフシェーラー所説を中心に——」関東学院大学大学院『経済学研究科紀要』第2号，1976年5月。
- 佐藤金三郎「産業予備軍理論の形成」大阪市立大学『経済学雑誌』第41巻第1号，1959年7月。
- 内田弘「第1部 マルクス経済学の生成・第2章 1850年～1867年」『講座 経済学史 III マルクス経済学の生成と確立』同文館 1979年。
- 山田鋭夫『『経済学批判要綱』における生産力と価値増殖』大阪市立大学『経済学雑誌』第82巻第6号，1982年3月。
- 八柳良次郎「マルクス「ロンドン抜粋ノート」の意義——『資本論』成立史研究の新たな課題——」『社会科学の方法』第14巻第8号，御茶の水書房 1981年8月。
- 八柳良次郎「マルクス「ロンドン抜粋ノート」における貨幣・信用論」東北大学『研究年報「経済学」』第44巻第1号，1982年6月。
- 森下宏美「「ロンドン・ノート」における人口論研究」『経済』第81号，新日本出版社 2002年6月，141～152頁。
- 大月書店編集部編『マルクス＝エンゲルス略年譜』大月書店 1976年。

※本稿では1840年代後半および1850年代初めの，もっぱらマルクスの剰余価値論の形成を扱ったが，本稿を，その理論形成にも多大な影響を与えたフリードリヒ・エンゲルスの生誕200周年記念としたい。